

---

# ホラーギルドへようこそ！！

ルナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホラーギルドへようこそ！！

### 【Nコード】

N1654M

### 【作者名】

ルナ

### 【あらすじ】

妖怪（一部人間あり）ばかりが集うギルド、  
『ホラーギルド』のメンバーは、全員が  
捨て子か孤児である。それがメンバーの  
条件だった。そして、あの一つが、最悪  
なギルド、『科学者ギルド』の被害者であること。  
『科学者ギルド』の本部を探し出し、壊滅させる  
ために、彼らは今日もギルドで働く。

## ギルドの日々

「ふざけんなっ！誰がはんぱもんだって！？」

ギルド内部に、少女の怒声が響き渡る。烈火のごとく赤い髪と、同じく紅い目、『禍の目』と呼ばれる目を持つ少女だ。

名はサヤ。サヤ・ライリー。

人間の父親と、人狼である母親との間に生まれた、  
半妖の少女である。

『ホラー・ギルド』の創立者であり、リーダーでもあった。

鋭い牙をむいて唸られ、少女を罵った依頼人が、ひっ、と声を上げた。

この世界に住まうのは、魔物・妖怪・人間。が、その狭間に位置する者、

いわゆるハーフは、差別の対象として、中傷などを受けていた。このサヤも、その例にもれない。

「リーダー！！サヤ！！落ち着いて！！」

金髪金目の幼き吸血鬼、ルイズ・ドラクールが

彼女をはがいじめにして止める。金の目に涙がたまった。

「止めるな、ルー！！」

「駄目だってば！！相手は依頼人だよ！？」

「だって、こいつ、オレのことははんぱもんって呼びやがった！！」

「みんな、見てないで手伝ってよー！！」

ルイズ（愛称ルー）の声を受け、イチゴミルクを飲んでいた少女が、

面倒そうに顔を上げた。かわいらしい顔をしているが、表情は欠片もない。

雪ん子のゆきなだった。

白に近い銀の髪を揺らし、彼女はふうつと息を吹きかける。

サヤは氷像になり、動けなくなった。

「今の内に逃げてください!!」

ルーはサヤを下におろし、涙目で依頼人に言う。依頼人はチツと舌うちし、

二度とこんなところくるか、と吐き捨てた。

「あっ!!」

ルーが青ざめる。ゆきな銀色の目が、ぎらぎらと妖しく光っていた。

ここのギルドは、彼らにとって唯一の居場所なのだ。

全員が、親が死んだか、捨てられた、親のいない子のみで結成されたギルド、

それが『ホラーギルド』だった。

「人間風情が、このギルドをバカにするなんて。今すぐ殺してやる!!」

「ゆきちゃん落ち着いてえ!! 早く、あなたも逃げて!!」

ゆきちゃんは有言実行の人なの!!」

今度はゆきなを取り押さえ、ルーが叫ぶ。命の危機を感じたのか、彼はすぐに本部から出て行った。

数分後、氷から解放されたサヤは、ぶるぶる震えながら、  
ぬるめの紅茶をすすっていた。猫舌なのだ。

「うつつ。寒かったあ!!」

「まったくお前は、どうしてそう怒りっぱいんだ?」

「だって!!」

この中で一番の年長者、褐色の肌の青年、  
エリオット・アディソンが、じろりとサヤを睨みつけた。

彼は妖怪ではない。人間だ。

人間にもいろいろとふしぎな力を持つものはいて、

そうゆう人間ならば、このギルドに入ることができるのである。

そういうものたちも、一部は差別を受けることもあった。

エリオットはその一部の人間だ。

サヤの狼の耳が、犬のようにぺたりと垂れた。

「ゆきなも、また騒ぎを起こしたらしいね」

ふん、と彼女は鼻を鳴らした。分厚い辞書をめくる手を止め、睨み返す。

「あんなやつ、依頼を受ける価値もないわ」

「ムカツクのはわかる。オレだって、その場にいたら怒ったと思う。だがな、だからって、何をしてもいいってわけじゃないぞ!!」

「だって、悪いのは、あいつだろ?!」

「そうよ、そうよ!!」

「もうその辺で許して差し上げたら?」

優雅に玉露をすすっていた、巫女の少女、あすまなぎさ吾妻夙が立ち上がってエリオットを見つめていた。

巫女は妖怪たちの仲間でも、人間の仲間でもない。

だが、聖職者、いきがみさま生神様として崇められているので、そんな不遜なことをするものはいなかった。

「夙さま、しかし……」

「わたくしの言うことが聞けませんの?」

桜色の着物に葡萄酒色袴の彼女は、エリオットの主だった。

彼は、ギルドの仕事以外に、彼女の神殿に仕えているのだ。

主従関係にあるエリオットは、彼女に逆らえない。

「わかりました、夙さま」

「なぎ、ありがとう」

「なぎさ、ないす!!」

パチンと三人はハイタッチをした。はあっとエリオットがため息をつく。

ルーがポンと肩を叩いてなぐさめた。

このギルドのメンバーは、下は十歳から、上は十七歳までいる。

妖怪・魔物などが多いギルドだった。

仕事がなくなったので、それぞれが思い思いに過ごす。

サヤは自分用の小さなソファで寝転がりながら、推理小説をめくっていた。

犯人を考えるのが好きなのではなく、単に犯人を絶対に当てられるのが

面白いだけだ。サヤのカンは、ほぼあたるのである。

と、彼女の手から本が奪われた。

「サヤ、寝ながら読んじゃ駄目ですわ。目が悪くなります」

「なぎ！！ 返してよ！！ オレの目は人間よりかなりいいんだぞ！！」

「だ・め・で・す」

笑顔ですごまれ、サヤは渋々起き上った。

野生のカンで、強いものには逆らわない性分なのだ。

ゆきななは辞書を読みまくり、ルーは花壇などの世話をしている。

エリオットは、洗濯当番なので、全員の洗濯ものを運んでいた。

「みなさん、おやつですよ」

「早く集まれよ」

白狐の夕顔と、無愛想な魔導師<sup>ウィザード</sup>、シオン＝エレットが、

おいしそうな匂いの焼き菓子を持ってきた。

彼らは料理好きで、個々の好みに応じて、食事やおやつを作ってくれるのだ。

サヤはいち早くテーブルについた。

夕顔がニコニコしながら皿を置く。サヤのおやつは、ハチミツでかためた

アーモンドを乗せたタルトのお菓子、フロランタンだった。

「シオン、私にもちょうだい」

ルーが戻ってきた。きちんと手を洗い、汚れたエプロンを取り換

えている。

シオンは赤面症なので、いつも仮面をつけているのだが、彼女の顔を見た

とたん、耳が赤くなっていた。シオンはルーが好きなのだ。

「ん」

照れくさいのでわざと冷たく言い、べえっとルーに舌を出され、仮面の下

で落ち込む。いつものことだが、サヤはあきれたようにそれを見ていた。

ちなみに、ルーはシオンの気持ちに、これっぽっちも気づいていない。

ふわふわのチョコスフレの皿を持ち、彼女はサヤの隣に座った。

サヤは文句を言わない。いつだって、サヤの隣はルーだった。

サヤが頬をハチミツでべたべたにしているので、ティッシュで拭いてやったりと、

かいがいしく世話を焼くルー。サヤはルーより年上なのだが、無頓着なところ

が多々あるのである。

と、ぴくりと、サヤの黒い耳が動いた。

「誰が来る」

「え？」

「足音が近くでする」

扉が開かれ、チリリンと、扉につけられたスズが鳴った。

「はい、いらつしやいませ」

一番愛想のいい夕顔が、おやつのでき餅を一旦置き、玄關に出た。

お尻のあたりでふさふさと揺れる三本の白い尻尾に、人間らしき依頼人はヒツと声を上げた。

「ご、ごめんなさい、ぼく、妖怪の方って初めてで」

「構いませんよ。あなたは、どんな依頼で来たの？」

おやつを食べ終わったサヤが、ひょこりと顔を出した。

「この子がこのリーダー、サヤ<sup>ハーフ</sup>ライリーです。

半妖ですが、優秀ですわ。私は接待役の夕顔です」

依頼人は目を丸くした。初めて来た人は、リーダーがまだ幼い少女で

あることに驚き、ここがほぼ妖怪だけというところに驚き、中には半妖<sup>ハーフ</sup>がいることに驚くのだ。驚くのはまだ良い方で、

サヤを表切って罵るやつは、追い出されるのだが。

ほうけたように、少年の目はまっすぐにサヤを向いていた。

その目には、侮蔑や拒絶はない。

ただ、称賛の輝きが見て取れた。

「きれいだ……」

ボソリと言われた言葉に、サヤは思わず赤くなった。

## ギルドの日々（後書き）

また連載を始めてしまいました。ぜひ見てください。

## ギルドメンバーの絆

依頼人は、倉木ルカと名乗った。

巫女の母親と、妖怪・天邪鬼あまのじゃく

の間に生まれた、半妖ハーフらしい。

ギルドのリーダー、サヤ＝ライリーと同じだ。

「あんた、何の用なんだ？」

サヤはじいっと紅い目で彼を見ながら言った。

場所はさっきの場所ではなく、客間だ。

品のいい家具や調度が置かれている。

今ここにいるのは、一番の年長者、エリオット＝アディソンと、

サヤの親友・ルイズ＝ドラクール（愛称・ルー）だった。

困ったような笑みを浮かべているルカに、サヤは苛立ちを感じた。

「早く言えよな。こっちだってヒマじゃないんだよ」

「今日は仕事ないだろ」

エリオットが言い、紅くなってサヤが睨んだ。

「う、うるせえよ！！」

「はいはい、リーダー。オレは黙ってます」

「うとうとうっ！！ その口調がムカつく！！」

「あの、えっと、その……」

サヤに威圧され、ルカはオロオロとしていた。

「早くしろっば！！」

サヤが牙をむいて唸る。さらにルカは怯えた。

さっきからこの繰り返しなのである。

「サヤ！！ 依頼人をおどかしちゃ駄目だよ」

たまりかねてルーが口を開いた。チツと舌打ちが響き、

エリオットがじろりとサヤを睨む。

「あの、科学者ギルドって知ってますか？」

三人はギョッとなった。特に、サヤの反応がすごかった。

顔が蒼白になっている。体が小さく震えていた。だらだらと脂汗らしきものの流れていた。

「あの……大丈夫ですか？」

ルカが近づき、手をさしのべようとする。

「や……やあああああつ！！」

来るなッ！！ 来るなああああああつ！！」

咆哮のような悲鳴が響きわたった。

ルカはビクッ、となり、手を引つ込める。

何かに怯えた少女は、ルカの方を見てはいなかった。

紅き眼は空中をさまよっていた。

やがて、フツと支えを失った人形のように、彼女は倒れた。ぐったりと倒れて動かない。まるで死んだように。

ルーがサヤを抱き上げた。

「私、サヤを寝かせてくる。ゆうちゃんと、なぎちゃんに変わってもらってもいいかな？」

「いいよ、その方がいいだろう」

ルーはルカに頭を下げ、そのまま出て行った。

すぐに、夕顔と、あすまなぎさ吾妻夙がやってきた。

「あなたが依頼人なのね。吾妻夙です、よろしく」

「あ、はい。よろしくお願いします」

サヤが先ほど座っていたところに座るなり、夙は悲しそうな顔でルカに語った。

「ルーに聞いたんだけど、あなた、科学者ギルドと何か関係があるそうね」

「あいつらは、僕の妹を殺したんですッ！！ 表向きは自殺ってことになってるけど、そんな訳ないっ！！」

あの子は恋人だっていたし、幸せだったんだ！！」

ルカはさっきまでの気弱さが嘘のように、怒りにまかせて叫ぶように言った。ぼろぼろと涙がこぼれおちる。

痛々しい怒りの表情が、二人の同情を誘った。

「あなたも、被害者なのね」

「あなたも？」

「私たちも全員が被害者なのよ。特にひどいことをされたのが、ルーとサヤ」

そこまで言ったところで、夕顔がお茶菓子とお茶を差し出した。ヨウカンと玉露だった。

場の空気が少しなごみ、夙は感謝するように彼女に一礼した。夕顔はにこにこして出ていく。

「毎日ひどい実験を受けさせられていたの。もう少しで殺されるところだったらしいのよ。だから、あのギルドの話は、ここでは禁句なの」

「わ、わかりました」

ルカは二人に、ここで働かせてくれるように頼んだ。

彼は身寄りがないそうなので、条件は満たしている。

二人は二つ返事で了承した。

翌日のことだった。目覚めたギルドリーダー、サヤは、勝手な判断でルカをメンバーに入れたことに激怒した。

「どういうことだよ！！ リーダーはオレだぞ！！」

「客の前で倒れたのはお前だろ、サヤ。ルカは被害者で家族がいない。条件は満たしてるし、何の問題もない」

「そういうことじゃねえよ！！」

サヤは白い頬を真っ赤に染めて怒っていた。

「俺に無断で入れたことを怒ってんだよ！！ 一言  
なにか言ってからにすべきだよ！！」

「そんなことで怒ってんのかよ、ガキだな」

「誰がガキだ、このやるおっ!!」

サヤがこぶしを振り上げた。エリオットによけられ、バランスを崩して倒れこむ。

と、ぐいっとながれ、黒い獣の耳を引っ張った。

それはサヤの弱点だ。彼女は涙目になった。

尻尾がくるんと丸まった。

「い、痛い痛いっ!! エリオット!!」

「わがままもたいがいにしとけよ、サヤ?

さもないと、おしおきだぞ」

ひつとサヤが息を飲む。本気で怒った彼に

勝てるのは、夙いがいにはいないのだった。

「わ、わかった。わかったって!! だから

それだけはー!!」

勢いよく耳を離された彼女は、泣きながら自室に戻った。

その後は依頼もなく、騒動が起きたのは翌日だった。

基本、ギルドは、ギルド連合をおさめる長・ギルドマスターの依頼で賄われている。仕事をかなり休む・もしくは失敗すると、除名もありえるのだった。

『ホラー・ギルド』のリーダー・サヤは、ギルドマスターに呼び出しをくらっていた。

「何の御用でしょうか、ギルドマスター、ルウエン・サイラス様。『ホラー・ギルド』のリーダー・サヤでございます」

につこりとサヤはかわいらしく笑った。ルウエンと呼ばれた、かなり年老いた老人が赤くなる。

(けっ!! ロリコンヤロウが!!)

さすがにギルドマスターに逆らうわけにはいかず、サヤは笑顔を通していた。その身分じゃなかったら、確実にボッコボッコにされていると思われた。

「サヤ殿。あなたには依頼を受けていただきたい。それと、ギルドに対して苦情が来ていますよ」

「まあ。苦情ですって？」

（うるせえんだよ、くそじじい。死ねや、ボケエツ）

心中と実際のセリフには、かなりの違いがあった。

そもそも、サヤはルウエンが大嫌いである。

男と女では全然態度が違うからだ。そして、女性と少女でも違う。サヤは何度かこいつにナンパまがいのことを言われてきたのだった。

「苦情の権はこちらで処理をしておきました。依頼を受けていただけますね？」

（ああん？ 受けなきゃいけないんだろぅが！！  
強制ならわざわざ聞くなや！！）

「了解しましたわ、ルウエン殿。では、急ぎますので」

サヤは依頼書をひつつかみ、すぐに踵かかとを返した。  
ぐいっと腕を引かれる。さすがに、避難を込めて睨んだ。  
どうせ、こいつはこのくらいでは怒ったりしない。

「何ですか？」

「今日、家に来ないかね」

「仕事の確認がありますので」

「少しくらいいいだろう。かたい事を言うな」

ざらついた手がサヤの黒い耳を撫でた。

ぞくつ、とサヤの肌が粟立つ。

（おい、じじい！！ 調子のんじゃねえぞ、地獄落ちるか！？）

どんとサヤがルウエンを突き飛ばした。

紅い目に涙がにじむ。そのまま彼女は身をひるがえした。  
今度は足を掴まれ、すっ転ぶ。

「サヤ！！ 私に逆らうな」

「は、離せよ、くそじじいっ！！」

「リーダー！！」

蒼白になる彼女の前に、ルカがやってきた。

「る、ルカ!？」

「汚い手で、リーダーに触るなッ!!」

ばきいっと鈍い音がした。ルカが殴りつけたのだ。

あまり力のない彼は、痛そうにこぶしをおさえていた。

「サヤ、大丈夫!？」

ルーがサヤを抱きしめた。サヤは泣きながらルーに身をゆだねる。実は彼女も被害者だった。

「下衆……」

おなじく被害者の一人、雪ん子のゆきなが吐き捨てる。

目が怒りできらめいていた。シオン「エレットは無言で睨んでいた。

「家の子をいじめた罪、重いわよ」

夙がにこにこしながら言う。

「覚悟してもらおうか？ 俺たちの絆、なめんなよ」

「死んでも、文句は言わないでくださいね」

エリオットと夕顔も怒っている。ルウエンの悲鳴が高らかに響きわたった。

これまた翌日、ギルド会報には、ルウエン「サイラス、セクハラで解雇と書いてあった。もちろん、『ホラー・

ギルド』の名は書いていない。匿名で彼らは通報したのだ。

「あ、あの、さ。ルカ、ありがと……」

「いいんですよ、リーダー」

「サヤでいい。敬語使うな」

めずらしいじゃん、初対面のやつに懐くなんて。

そうエリオットにからかわれ、サヤはかっと赤くなった。

後日、ルカは、これがすべてヤラセだったと知らされ、打ちのめされるのだった。

## ギルドメンバーの絆（後書き）

この前の依頼人の子が仲間になりました。まだ依頼を一回もしていないので、次回は依頼をこなす様子を書こうと思います。

## 闇の世界の証拠を暴け　　前編・四人の勇者たち

温かい陽光が差し込む、ギルドの室内。

『ホラー・ギルド』のメンバーたちは、  
回された依頼書を確認していた。

ギルドリーダーのサヤ・ライリーが、  
メンバーたちを見やっている。

「これが久しぶりの依頼だぜ！！」

依頼の内容は、闇オークションに、  
？商品？として紛れ込むことだった。

盗品のほかに、珍しい妖怪や人間も  
売り買いされているというのだ。

「サヤ、どうだ？」

一番の年長者、エリオット・アディソンに  
聞かれ、サヤはこくりと頷いた。  
黒い獣の耳が揺れる。

「オレは受けるよ。『禍の目』なら高く  
売れんだろ、紛れ込むことはできるさ」

「サヤが行くならあたしも！！」

サヤの親友・ルイズ・ドラクールが  
手を挙げた。ゆきなが異を示す。

「あんだ、売れるの？」

「ゆきは知らないんだっけ？ ルーが  
『できそこない』って言われてた訳。

見せてやれよ、ルー」

ヴァンパイア  
ルーは目を閉じた。吸血鬼である彼女が、  
いつもは隠している羽根がふわり、と現れる。

それは、他の者のようにこும்りのような黒い羽根では  
なかった。妖精のように、透き通った夕日の色をしていた。

「あたしは隔世遺伝なの。何代か前に、妖精族と結婚した人がいたんだって」

ゆきなが目を見開いたまま固まっていた。

まるで、凍らされたかのように。

「他に行く奴は？」

シオン「エレットが手を挙げた。皿を並べた手を止めていて、夕顔に睨まれていた。慌てて作業を続行する。」

「ボクも行きたい」

「あ、シオンは駄目」

「なんでだよっ！！」

「シオンは売れないよ。なにも特徴ないじゃん。」

あ、そうだ、仮面取ってみるよ」

少し考え、サヤは紅い目でシオンを見やった。

シオンが抵抗するのを構わず、強引に仮面を奪う。

かわいらしい顔が現れた。

全員が目を見開いている。彼らは一度も、シオンの顔を見たことがないのである。

シオンはたちまち真っ赤になり、サヤに返せとせまった。

「駄目。仮面を取ったままじゃなきゃ、お前を行かせられないよ」

真っ赤になって彼は唸った。だが、どうしてもルーと一緒に

行きたかったらしく、渋々了承した。

「私も行こうかしら」

「なまけ夙様！！」

あすまなまけ吾妻夙がおつとりと言うと、

とんでもないとばかりにエリオットが叫んだ。

「あなたは駄目です！！ 巫女なのですから！！」

「巫女だからこそ、闇の世界を知っておかなくてはなりません」

「あなたには刺激が強すぎます！！」

言い合いの末、仕方なく夙はお留守番になった。

夕顔とエリオットとゆきなも待機。

まあ、行ったところで帰されるだろうが。

そして、新メンバー倉木ルカは、なんとOKした。

「僕も行きますー！！」あまのじゃく 天邪鬼と巫女って

いう組み合わせって、かなり貴種レアらしいんですね。それに、リーダーだって女の子ですし」

サヤが赤くなり、それと反比例するように、ルーが拗ねたような顔になった。

彼女は、サヤに姉のような感情を抱いているのだ。

役者が決まったので、了承印を押して、依頼書は新たなギルドマスターのもとへ郵送された。

サヤ・ルー・シオン・ルカは、人身売買を専門としている男に会いに行った。

その男は、後に摘発されるとは知らず、ほくほく顔で彼らを眺めまわしていた。

一人は上玉、三人は、珍しい貴種レアだ。

高く売れるのは間違いない。

「ところで、なんでおめえらは売られてえんだ？」

それを聞き、四人は顔を見合わせて、それぞれでうち上げな素性を話し始めた。

「あたし、父さんも母さんも死んだの。弟と妹はまだ小さくて、あたしが売られるしかないのよ」

女装をしたルカが、わっ、と泣きだした。

もちろん嘘泣きだ。ちなみに、ルカは女装は嫌だと最後まで抵抗していたが、シオンとともに説き伏せられた。

女性の方が高く売れるから、女装しろ、と命じられたのだ。

「私はこの目のせいで苦労しているから、この目売られるなら本望だわ。居場所はどこにもないんだもの」

「私は父さんと母さんに売られたの。でも、彼らと離れられる

ならどこへ売られたっていいわ」

「あたしだって!!」

サヤ・るー・シオンの順に話した。サヤは、いつもとは違つ口調なので、とても言いにくそうだった。

こうして四人は、とりあえず人買いの家でしばらく暮らすことになった。オークションまでは、まだ日があるらしい。人買いは、高く売れるからか、事情を憐れんでいるのか、意外なほどに優しくかったので、彼らは楽しく過ごすごうできた。

闇の世界の証拠を暴け　く前編・四人の勇者たちく（後書き）

やっと三話目です。依頼をあんまりしている様子を  
書かなかったので、今回三部でやってみます。

闇の世界の証拠を暴け　～中編・オークションへ～

どす黒い雲が空を覆う頃、

サヤたちはついにオークション会場に  
乗りこむことになった。

シオンは緊張と赤面症のせいで、  
耳までまっかつかった。

ルーとル力はどこか楽しそう、サヤは  
黒い獣の耳を寝かせて不安そうだった。  
顔は無表情を貫いていたけれど。

「これが今回の？品物？か？」

じろりと無遠慮に睨みつけられ、

サヤは鼻じろんだが、我慢して

黙っていた。人買いの男が頷き、

門番が道を開ける。

シオンとルーは、すれ違いざまに

こっそり舌を出していた。

サヤたちは、？商品？が集められた

部屋へと通された。日報（新聞のようなもの）

で紹介されていた盗品や、売られたと思わしき  
ものたちもいた。

「帰してよ！！　家に帰りたい！！」

泣いているものがほとんどの中、食ってかかっている  
ものが、一人だけいた。

頬を真っ赤に染めて怒鳴っているのは、まだ十歳くらいの  
女の子だった。ひととき人目を引く顔立ちに、  
白すぎない肌をしている。

「騒ぐな、ガキ」

「い・え・に・か・え・り・た・い・の・！・！」

「うるせえ!!」

男は激昂し、少女に殴りかかろうとした。

がたつ、とルカが座っていた椅子から腰を浮かしかける。

サヤが彼を見つめ、首を振った。

「どうしてですか、あの子、殴られちゃいますよ」

「大丈夫、黙って見てるよ」

小声でやりとりする二人。ルーが口をとがらせていた。

そして、サヤが言った通りになった。

キツ、と少女が睨むと、見張りの男が、石になったのだ。

元からそこにあつた石像のように、動かない。

否、動けないのだ。きゃあああつと悲鳴が上がった。

「あの子、ゴーゴン族なんだよ」

サヤは真剣な顔で言った。ルカが聞き返す。

「なんですか、ゴーゴン族って?」

「メデューサって知ってるだろ? それが

ゴーゴン族の祖だ。見つめた相手を石と

変える最強の魔物だよ」

「なんでわかるんですか?」

「オレの鼻をなめんなよ。上手く変化してるけど、

蛇の匂いがぶんぶんしてるんだよ、あの子から」

サヤは人狼ルー・ガルであり、変化していなくとも、

味覚・嗅覚・視覚・聴覚が優れていた。

普通の人間であれば気付かないような匂いでも、

サヤには隠しようがなかった。

二人の会話が聞こえていたのか、さっきの少女が

こちらにやってきた。

「あなたたち、どこのギルド? 私がゴーゴン族と

分かるなんて、すごいね」

「そちらこそ。能力を制御できるのは、数人しか

いないって話だけど?」

今、少女の目はまっすぐにサヤを向いていた。

サヤも彼女の目を見返している。

が、サヤは石にはならなかった。

ニヤリ、と少女は笑った。

「純血で力のもとから強かったの」

「ふうん。オレたちは……つと、うーん、

あ、少し待てよ」

サヤは言葉を濁すと、目を閉じて少し黙っていた。

ややあつて、もういいよ、と声が返る。

ギルドメンバーと、少女の頭の中から。

「念話ね、そんなことまでできるの」  
テレパシー

少女は目を見張って感心していた。

？オレたちは『ホラーギルド』のメンバーだ。リーダー

はオレ。サヤ＝ライリー？

「倉木ルカです」

「ルイーズ＝ドラクール。ルーって呼んで」

「シオン＝エレットだよ」

「私はルミア＝ラキオン。ギルドには入ってないわ。

よかったら、あなたがたのギルドに入れてくれない？」

？親はいるか？ それと、ルー、説明頼む？

サヤは自身の顔が青ざめたのに気付き、ルーに説明を

依頼した。ここで倒れたらやばい。依頼を完了できない。

気持ちが悪そうに口元を抑えるサヤ。

ルーは頷き、口を開いた。

「あなたは科学者ギルドを知ってる？ もしくは被害者？」

「科学者ギルド……！」

少女の目が赤く染まった。目を閉じろ、とサヤが叫ぶ。

全員が目を深く閉じ、彼女の力は壁と観葉植物を石にした。

「あなたがたも被害者なのね。忘れたくても忘れられないわ、

あいつらっ！！ 全員殺してやりたいっ」

「何があつたの？」

ルーが思わず聞いた。すごい剣幕に、少し怯えている。サヤの耳も伏せられていた。

「あいつらは幼い私を兵器のように扱つたのよ。多くの人間や、妖怪たちを石にさせた。その頃の私は、それが罪だと知らなかったけど。」

私がギルドを抜けようとしたら、あいつら私を売つたのよ」

？いいよ。君もギルドの仲間入りだ。オレたちは、今、潜入捜査の真つ最中なんだよ、闇オークションの、な？

「光栄だわ」

こうしてメンバーを一人増やし、サヤたちは仕事を続けた。

ついにオークションが開催された。

貴重な盗品が出品され、競りが始まる。

？商品？としてその場にいる『ホラーギルド』は、

その様子を、隠し持っている小型の機械で記録していた。

泣きながら一人の少女が舞台に立たされる。一人、また

一人と少女たちは消えていき、ついにサヤたちの番が

回ってきた。ぐいつ、と腕を掴まれ、サヤはできるだけ

冷静な顔で舞台へと上がったのだった。

闇の世界の証拠を暴け 〱 中編・オークションへ〱 (後書き)

ついにサヤたちがオークションに参加します。

闇の世界の証拠を暴け　　後篇・依頼成功！？

サヤ・ライリーは、オークションの

舞台に立っていた。一見落ち着いている

ようにも見えるが、黒い耳は完全に垂れ、

尻尾はややふくれていた。

『さあ、この少女は人狼と人間との半妖だよつ！！』

貴種だ！！　ご入札は一万ギルアから！！』

「二万」　「五万」　「八万」　「十万」　と一気に値が上がっていった。

ポンツ、と気の抜ける音とともに煙があがり、サヤの姿が消える。否、消えたわけではなく、サヤの姿は黒い狼の姿になっていた。

サヤの変化が解けたのだ。あまりの恐怖に、耐えられなくなっていたようだ。

小さな狼の姿に、さらに会場は盛りあがった。

さらに値が上がっていく。びくびくと黒い狼は身をすくめていた。

結局、サヤは一千万ギルアで落札された。

目を黒い眼帯でおおった、やけに香水の匂いが強い男だった。

心配そうに見守るギルドメンバーに笑い返し、

彼女はしっかりとした足取りで歩いて行った。

狼の姿なので、かなり笑顔に違和感があったけれど。

次に出されたのは、世界に一つしかないという貴重なダイヤ、

ブラックダイヤモンドだった。禍々しき光は、まるで魔界の

光のように人々の目を奪っていく。石はそれに、かなり大きかった。

比較するのならば、占い師の使う水晶玉くらい大きい。

「すごいわ、しかもこんなにおおきいだなんて」

ルミアはうつとりとしたように呟いた。ルーも、金の月のような目を一段と美しく輝かせている。何がそんなにいいんだろうね、とサヤは思った。彼女は闇の匂いに敏感なので、

それほどいいものとも思えなかった。第一、宝石なんて興味はない。つまらなそうにしているサヤを、眼帯をした男が興味深そうにながめていた。

「宝石には興味が無いのか？」

「ない。女が全部そんなヤツだけだと思ったら、大間違いだぜ」小憎たらしくサヤは舌を出した。今は人間の姿に戻っている。かなり気分が落ち着いたらしかった。

「俺が今まで見た女と、お前は違うようだな」  
「だろうな」

これ以上はもう口もききたくなくて、サヤはふいと横を向いた。男は怒るでもなく、楽しそうに見ている。

サヤはこの男をどこかで見たことがあるような気がした。だが、匂いがきつくて鼻が利かないし、頭もうまく働かない。正体はわからなかった。

苛立つサヤを、おかしそうに男が見ていた。

「なによなによ、あんなになかむつまじく!!」

「ルー、君の目は節穴かよ」

「シオン、うるさいっ!!」

「あの、二人とも、大声はよそうよ。睨まれてるよ」

会話している二人に、ルーが唇をとんがらせて怒っていた。シオンがつつこんでさらに激怒させ、オロオロとルカが止めている。

ルミアだけがくすくすと楽しげに笑っていた。

次に舞台に引き上げられたのは、ルーだった。震える体を鼓舞するように拳を握り、なんともなさそうな顔で舞台に上がる。ちらり、とカバンに仕込まれた機械

を見やると、キツ、と顔を上げて羽根を広げた。

夕焼け色の美しい翼が、風を受けたかのように羽ばたく。

オークションが始まった瞬間、さっきサヤを買った

男が「五万ギルア」の札を出した。

別の男がどんどん値を吊り上げていき、さっきの男は

ルーを買うことはできなかった。

落札されたルーを、競り落とした男が連れて行くとする。

ルーは抵抗し、羽根は少し取れて宙に舞った。

その時、である。

「そこまでだ！！」

眼帯の男が、壇上にいきなり飛び乗った。彼が何事か合図をすると、バタバタと大勢のものたちが、オークション会場に集結した。サヤたちとは、別のギルドのものたちだ。

会場は阿鼻叫喚と化した。逃げる客たちと主催者たち。

が、ギルドメンバーが全員をすぐに拘束してしまった。

ハツとなり、サヤが裏返った声で叫んだ。

「あいつつ！！ 新しいギルドマスター！！」

『ええっ！？ この人が！？』

「間違いないえよっ！！ ああああああつ、悔しいっ！！

全然わかんなかったぜ！！」

じたんだを踏みながら、顔を真っ赤にして怒るサヤは、

普段よりもかわいらしかった。ルカがみている。

「いいとこどりしやがつて」

サヤは、帰宅するさい、ぶつぶつと文句を言い続けていた。

翌日、昨日のギルドマスターが、

報奨金と新たな依頼書を持って、『ホラーギルド』へ

やってきた。

サヤはすっかり不機嫌で、じろりと彼を睨みつけている。

「ご機嫌ナメだね、お譲さん」

「お譲さんって言うな！！ オレはサヤ＝ライリー！！  
それ以外の何ものでもねえよっ！！」

スツ、と男がサヤの手を取った。

眉をしかめて振り払おうとする彼女を尻目に、  
いきなり手の甲にキスをした。

カツとサヤが赤くなり、ルカとルーが激怒した。

「ななななななっ、なんってことを！！」

「許さない、この人敵っ！！」

ニコリと笑う男に、サヤも笑い返した。

そして……

満身の力を込め、その腕にかみつки、  
彼に悲鳴をあげさせたのだった。

「いててて、なんだ、あのじゃじゃ馬は」

家に帰ったギルドマスターは、血のにじむ

腕をさすりながら呻いていた。あんな女は初めてだ。

彼は人気があるほうで、さっきサヤにしたことを  
すれば、だいたい女は彼に才ちるのだった。

「絶対におとしてやるよ」

彼は自身の血をなめながら、サヤのことを想う  
のだった――。

闇の世界の証拠を暴け　　く後篇・依頼成功!??　　(後書き)

サヤのことを気になるヤツが出てきました。

これからは、恋愛の要素が濃くなると

思います。

## ギルドマスターVSギルドリーダー

我らが『ホラーギルド』のリーダー、サヤ＝ライリーは苛立っていた。

額に青筋を立てていた。尻尾がかなりふくれていた。

原因は、訪ねてきた眼帯をした男、ギルドをすべるギルドマスターのせいだった。

こんな態度をとっているのは、サヤだけではない。

倉木ルカと、ルイズ＝ドラクール（ルー）も、

睨むようなきつい視線を向けていた。

「帰れよ。ギルドマスターだからって、オレが態度を帰ると思ったら、大間違いだぜ」

「君が普通の女の子と違うのは、もうわかっている」

「うるせえ、黙れよ。イライラする」

「そういうところがかわいい」

「うるっせえって言うってんだろそこおおおおっ!!」

サヤが勢いよく机を両手で叩いた。

ピシッ、ミシッ、という鈍い音と共に、机が真っ二つになって書類がばらまかれる。

「あ……」

「さ……や……!!」

「ご、ごめんなさい!! でも、これはあいつのせい……」

「人のせいにすんな!!」

「いいってええええっ!!」

サヤは全員の保護者役である、エリオット＝アディソンにげんこつをもらって涙目になった。

ぶくっ、とできたたんこぶをさする。

「大丈夫か？」

「うわっ、な、何する……」

男にいきなり抱き寄せられ、サヤは目を白黒させた。  
ざわっ、と心が騒いだ。こいつは駄目だ。

心が落ち着かない。嫌だ。

ガブツ、と再びサヤは噛みつこうとした。

襟首を掴まれ、子猫のように持ちあげられて、悔しげに  
歯ぎしりする。二回目ともなると、向こうも大体どんな  
反応がくるかわかっているらしい。

「ちくしょおおおっ！！ 離せ、コノヤロっ。オレは

猫じゃねえ！！ 狼だぞ！！ 怒ったら怖いんだからなっ！！」

牙をむきだして唸る少女に、男はあしらうように、ああ怖い、  
と言い、さらに怒らせていた。

「もう、いい加減にしてっ！！」

「リーダーになにするんですか！！」

ついにルーとルカが大爆発した。ルーに片思い中の少年、  
シオン「エレットがためいきをついている。

不穏な空気がその場に漂った。

「皆、おはよう」

「おはようございます」

だが、その空気は、あずまなざと吾妻夙と夕顔に

よって壊された。ゆきなは今日非番でいない。

「あら、ギルドマスター、今日もいらしてたんですね」

「私お茶いれてきますわ」

二人はお茶をいれるために奥へ行ってしまった。

男はサヤを地面におろしてから言う。

「ところで、サヤ。これから食事に行かないか？

おいしい肉料理を出す店があるんだ」

「ふん、食べ物で釣ろうつたってそうはいかないぜ」

「……リーダー、カッコイイこと言ってますけど、

よだれが垂れてます」

「サヤ！！ 尻尾まで振っちゃってるよ！！」

「あつうつうつつ」

サヤは二人に指摘されてうつむいた。体は正直である。

無意識のうちに、彼女はよだれを垂らして尻尾を振っていた。

「いいぜ、一緒に食事してやるよ」

「「サヤ（リーダー）！！」」「」

ルーとルカが不満をあらわにして叫んだ。男は早速手を差し伸べ、これから行こうか、と言う。

が、サヤがその手を払った。

「ただし、条件がある」

「条件？」

「オレとデートしたいのなら、オレと勝負しな。お前が勝ったら、デートでもなんでもしてやるよ」

「おもしろい……」

こうして彼らは戦うこととなった。

「エリオット、書類作成お願い！！」

「また俺なのか！？」

「エリオットが一番頭良いじゃん！！ お願いな！！」

仕事をエリオットに押し付け、サヤは外に出た。

仕事場に出てきた新入り、ルミア「ラキオンを審判に、勝負が始まる。夕顔と夙が、お茶をいれて帰ってきたが、結局誰も口にできなかった。」

「武器は使わないのか？」

レイピアと呼ばれる細長い剣を構えて男が言った。

サヤは拳を構えながら言い返す。

「オレが使つのは、武術なんぞでな！」

「ギルドマスター、ルイア＝ラクレンサ、参る！！」

「『ホラーギルド』リーダー、サヤ＝ライリー、参る！！」

サヤの蹴りと、ルイアのレイピアがぶつかった。

ルイアは押されて下がる。

サヤの顔に笑顔が広がった。

「オレに勝とうなんて、一億万年早いだよっ！！」

「力がうわまつていようが、こちらも負けるわけには  
いかない！！」

螺旋を描くように剣がサヤを狙う。

軽々とよけるサヤ。そのまま、サヤはえぐるようなパンチを  
ルイアのみぞおちに叩きこんだ。絶叫が上がる。

だが、ルイアも黙ってやられている訳ではなく、突き出された  
レイピアが慌ててよけたサヤの耳をかすった。

「うっうっうっうっうあああああっ！！」

前にも言ったが、耳はサヤの弱点である。たえがたい痛みに、  
サヤはゴロゴロとその場でのたうちまわった。

血があふれ、土にしみ込んで消えていく。

「とどめ！！」

ルイアが剣を振りかぶる。ルーとルカの悲鳴が上がった。  
そして――。

ルイアの剣が届くより先に、サヤの蹴りが彼の顎を捕えていた。

「やったあ、オレの勝ちっ！！」

勝利したサヤは、傷のことも忘れて飛び上がり、涙目になった。  
ルーが慌てて走り寄り、傷を回復させる。

「勝負はいつでも受けてやるぜ」

得意そうな顔で言うサヤに、ルイアは悔しげな目を向けていた。

## ギルドマスターVSギルドリーダー（後書き）

ギルドマスターの名前がここで明かされます。  
彼はまだあきらめないのです、たびたび登場  
しますよ。

## 依頼人はじゃじゃ馬姫

じりじりと照りつける陽光を浴びて、

ストリートファイトが今日も行われていた。

戦っているのは、『ホラーギルド』の

リーダー、サヤ<sup>II</sup>ライリーと、ギルドマスターの  
ルイア<sup>II</sup>ラクレンサだった。

「とつとと負けを認めなっ！！」

「まだまだ私は戦える！！」

サヤは器用にルイアの攻撃をよけつつ、

朝ごはんのローストビーフのサンドイッチを  
頬ばっていた。上機嫌だ。サヤは人狼<sup>ル・ガル</sup>なので、  
肉類が好物なのである。

「夕顔、シオン！！ おかわりちょうだい！！」

「了解、リーダー！！」

今度はタマゴサンドが空を舞う。サヤは華麗(?)に

口でキャッチ。ついでにルイアの腹にキックを叩きこんだ。

ルイアが吹き飛び、サヤの着地が見事に決まる。

「うまいよ、やっぱり！！ もう一個ない？」

「どんどん作ってるわよ、サヤ！！」

「サヤのごはんは作りがいがあるよね」

調子に乗って空中を舞いながら、次々とサンドイッチ

を腹におさめていくサヤ。シオン<sup>II</sup>エレットも、夕顔も

笑顔でサンドイッチを投げていた。

と、その時。

「あなたたち、何をしていますの？」

冷やかな声が響き渡った。

ヤバイ……。

さあつ、とシオンとサヤが青ざめた。

ぎぎぎぎつ、ときしむような音を

立てて振り向く。案の定、巫女の少女、

あすまなぎさ  
吾妻夙が笑顔で立っていた。

目が笑っていない。明らかに怒っていた。

その背には黒いオーラが二人には見えた。

「あ、あの、ゴメンナサイ……」

「もうしません……」

彼らはげんこつをもらった挙句、

二時間にわたって正座でお説教をくらったのだった。

ちなみに、夕顔はいつの間にかいなかった。

ルイズ・ドラクール、倉木ルカ、ルミア・ラキオン

は心配そうに見ていたけれど、決して助けてはくれなかった。

二時間後、『ホラーギルド』のメンバーたちは、

ギルドマスターから依頼書を受け取った。

あまりにも遅い出し方だったので、サヤが

「もっと早く出せよっ!!」とぶつとばした。

少し遅れてきたゆきなど、エリオット・アディソン

と共に、ギルドメンバーは依頼書を見た。

依頼人は、なんとお姫様だった。はねっかえり姫が、

遊び相手を欲しがっているのだという。

「はい、却下」

「サヤ!!」

即座に破棄しようとしたサヤの手を、

エリオットの平手が叩いた。ルカ以外の全員が冷たい目で彼女を見ている。サヤは小さく呻いてうつむいた。

彼らが怒っている理由は、お姫様がかわいそうだから、では決してない。依頼の料金がかなり高いからだった。

世の中金、という訳ではないが、あるにこしたことはない。

「わかったよお、やればいいんだろやれば」

すねたように頬を膨らませつつサヤは渋々了承した。

了承印を押して、ギルドマスターに直接手渡す。

彼はすぐに本部に帰って行った。

本当に仕事をしているのか、と疑いたくなるメンバーたちだった。

あれから、彼は何度もサヤに勝負を挑んでくるのであった。

一時間後、城には、サヤ・ゆきな・ルー・ルミアの姿があった。  
すぐに準備をして城に乗り込んだのだ。

やってきた魔物たちに、門番はギョツとなって武器を突き付けて  
来たが、王女に頼まれたことを告げるとすぐに通してくれた。

その後もたびたび見とがめられたけれど、王女の名前を  
出してそれ乗り越え、ようやく姫様の部屋にたどりついた。

そして――

「遅いっ――！」

いきなり怒鳴り声が飛んできた。この部屋の主のものだ。

「遅い遅い遅い遅い遅いっ――！」

色白の顔を真っ赤に染めた姫様は、じただ地団駄を

踏みながら遅いを連呼し始めた。

ムツとなり、サヤが何事か言いかける。

が、その口はルミアに素早くふさがれてしまった。

「すみませんね、お姫様。遅くなりました」

「ルーンだ。呼び捨てで呼べ。敬語も使いな」

「あの、でも……」

「敬語を使っとなっ――！」

だんだんだんと再び地団駄が始まる。ルミアはこの子  
石にしてもいいかな、と本気で思ったという――

**依頼人はじゃじゃ馬姫（後書き）**

続きものです。

次回は全員のバトル

シーンを書こうと

思うので、次回も

見てください。

## じゃじゃ馬姫の憂鬱

サヤ＝ライリーは、ルイズ＝ドラクール、  
ルミア＝ラキオン、ゆきなど共に、  
じゃじゃ馬姫、ルーンの部屋にいた。

サヤ以外は、わがままな彼女を  
もてあまし、嫌な顔をしていた。

サヤはカンのいい娘だ。

精一杯強がっているのが、彼女には  
わかっていたのだった。

「なあ、ルーン何して遊ぶ？」

ルーンは口を開きかけたが、結局  
やめて口をつぐんでしまった。

一人で本を読み、彼女たちに背を向ける。

ルーたちはさらに眉を吊り上げ、

サヤはあーあ、と思った。

この姫は、人との付き合い方を知らないのだ。  
親しい人など、ほとんどいないのだろう。

「書物庫に行ってくる」

そんな時、ルーンはおもむろに立ち上がり、  
部屋を出て行った。

彼女がいなくなつた途端。

「あの子、無愛想だよね」

頬をふくらませたルーがそう言ったのを皮切りに、  
それぞれが悪口を言い始めてしまった。

あまりのことに、たまりかねていたのだ。

「呼んでおいて、あの態度はないわよね。」

何さまのつもりなのかしら」

「王女サマでしょ。傲慢な」

ルミア・ルー・ゆきなかくすくと意地悪そうに笑いだし、サヤはため息をついた。

王女のことを話そうとする前に、ドサツ、と何かを落とす音が響いた。

ギョツとなり、全員がおしゃべりをやめる。

そこにいたのは、ルーンだった。

顔を真っ赤にし、泣きそうな顔をしている。

「……っ!!」

たえきれなくなっただのか、目から涙をこぼすと、彼女は走り去ってしまった。

「姫さん!!」

サヤは書物を拾いながら追いかけようとしたが、ルーが力強い手でそれを掴んだ。

「放っておけばいいじゃない、あんな子」

サヤは刺すような冷たい目でそれを睨む。

驚いたように、ルーの手の力が緩んだ。

「本気で言ってるのか、ルー？」

「え？」

「本気で言ってるのか、つってんだよっ!!」

サヤの拳に殴りつけられ、部屋の壁がへこんだ。

いきなり怒鳴りつけられ、ルーの目は水っぽくなっている。

サヤはそれを構わず、苛立った声で続けた。

「見損なった。嫌なら、とっとと帰れよ」

「サヤ!! 今のはひどいんじゃないの？」

ゆきなが倒れ掛かったルーを抱きとめながら、非難のこもった目を向けてきた。

「ああ？ 人事じゃねえかよ、お前らにも言ってるんだぜ」

すっかりキレたサヤは、容赦なく言葉を投げつけていた。ルミアも困ったように

肩をすくめている。

「確かに、あの姫さんは態度が悪かったかもしれないよ。でもな、オレらの態度に問題はなかったか！？ ちょっと無視されたからって、あの態度はないんじゃないか？」

黙りこむ全員を放置し、サヤは部屋を飛び出した。仲間はずれにされた経験が、今のサヤを突き動かしている。

少し容貌が違うからといって、無視され、つぶてをぶつけられ、中傷を投げられた自分。

その時の記憶が、サヤの心に蘇った。

この状況はその時とは違うが、仲間はずれ、ということは同じだった。

「姫さん、返事しろよ！！ 戻ってきてくれ！！ 嫌な予感がするんだよ！！ 姫さん！！」

サヤは大声を張り上げる。

自分のカンが外れたことがない。

新しくできた友達を、なくしたくはなかった。

向こうはそうは思っていないかもしれない。

だと、サヤにとってルーンは友達だった。

「あっ！！」

あまり急ぎすぎたため、サヤは足をすべらせて赤い石が敷き詰められた廊下に倒れ込んだ。

手に血がにじむ。だが、痛みに顔をゆがめながらも、サヤは立ち上がった。

とー

「きゃあああああっ！！」

ルーンの悲鳴！！ 続いて、何かの焼けるような匂いと、耳をつんざくような爆音が響いてきた。

「姫さん!!」

「さやあつ!!」

虹色の美しい羽根がサヤの目をかすめる。  
慌てたように、ルーが空中を飛んでいた。

「ルー!!」

「あの悲鳴、お姫様の!?!」

「そうだよ!! 何しに来た、ルー!!」

「お姫様を助ける!!」

キツと上げた顔は、決意に満ちていた。

「あたし、間違ってた。仲間はずれに

何度もされてきたのに、お姫様の

ことなんにも考えてなかった……」

ルーの心中を理解したサヤは、

頷いて笑顔になった。

走りながら話を続ける。

「他のやつらは?」

「あの子たち、あんまり早く走れない

みたいだから、空飛べるあたしが

先に来たの」

「そっか、わかってくれたのか?」

「もちろん!! みんなわかってくれたよ!!」

再びルーの悲鳴が響く。

今度は、さっきより近かった。

二人はスピードを上げ、声が聞こえる場所に  
急いだ。

「サヤ、あたしがお姫様を助ける!! いい?」

「ああ!! ……いや、オレが助ける!!」

ウィザード  
魔術師がいるかもしれないんだ。

ルーはそつちを頼む!!」

「了解!!」

ようやくたどりついた。ルーンはあおざめて腰を抜かしてしまっている。服が多少こげていたが、怪我はまったくないようで、二人はホッとした。

壁にはひびが入っているので、そちらに攻撃はあたたつたのだろう。

「姫さんっ！！ こっちだ！！」

サヤは素早くルーンに近づくや、その手を掴んで引き立たせた。力全部を使って

走り抜ける。本気を出したサヤに、勝てるものはなかないかった。

「待て！！」

「させないんだから！！」

追いかけようとした一人に、ルーンの力が直撃する。遅くなつてたどり着いたルミアとゆきなも、

すべに攻撃を開始していた。

「力全部使い切る」

「二人は追わせないわ」

氷像と石像がその場に現れ始める。

残りは、ルーがかなしばりで縛ったり、

見えない力をぶつけて動きを制限している。

だが、三人は気づいていなかった。

黒き水が、ひっそりと廊下を移動しているのを――。

## じゃじゃ馬姫の憂鬱（後書き）

次回もよろしくお願いします。  
まだまだ王宮編は続きます。  
サヤたちが大活躍です。

## 狙われるじゃじゃ馬姫

サヤ＝ライリーは、はねつかえり姫、ルーンの  
手をしっかりと握って走っていた。

烈火のごとく赤い髪が、窓から差し込む  
風に揺れている。小さな体には、汗の玉が  
垂れ落ちていた。

力を出し切ったことのないサヤは、

それがこんなにつらいこととは知らなかった。

「何故……私を助ける？」

「ああ!？」

訳が分からないという顔のルーンを、  
キツとサヤが睨みつけた。

びくつとなるルーン。

「なんでって、友達助けちゃいけないのかよ」

「とも……だち……」

「あんたはそんなこと思っちゃいけないかも  
しれない、でも、オレにとっては

あんたは友達なんだよ!」

「ありがとう……」

ルーンは心の中が温かくなるのを感じていた。

いつになく素直に礼を言う。

笑顔が太陽のように輝いた。

「私も、そなたと友になりたいと思うぞ」

「姫さん! 姫さんってのもなんかな、

ルーン、仲良くしようぜ!」

「もちろん!」

二人は今までの事も忘れて立ち止っていた。

ルーンの手が、しっかりとサヤの手を握り返す。

「うあ……」

「サヤ!？」

サヤの顔が青ざめていた。だらだらと脂汗のようなものが流れている。その顔には、苦痛の表情。

彼女の腹に、深々とナイフが突き刺さっていた。

血がポタポタと滴り落ちている。

「サヤッ!! どうした!!」

ルーンの叫び声に応える声は無く、

サヤの小さな体は崩れ落ちた。

倒れる前に抜いたらしく、

カラン、と血にまみれたナイフが落下する。

流れ出た血が、髪の色と混じる。

べつとりと服についた血は、ルーンの心を騒がせた。

「サヤ!! しっかりしろ、サヤ!!」

ルーンはサヤを助け起こした。血が服についたが、

そんなこと構ってられない。彼女は服の袖を

やぶり、サヤの腹にあてた。

血はまったく止まらず、布が瞬く間に真っ赤に染まる。

ハンカチももう一方の袖も、同じ運命をたどった。

「誰か、誰か助けて! サヤを助けて!!」

スカートのすそを少しやぶってサヤの腹に

押し当て、ルーンはひときわ大きな声で叫んだ。

サヤは精神力を使い果たし、黒い狼に変じている。

それをしっかりと抱きしめて、ルーンは

叫び続けていた。

黒い水が少しずつ近づいているのを、

彼女は気づいていない。黒い水から突き出た手

が、ナイフを握っていることに、彼女はまったく

気づいていないのだった。

「血の匂いがしない？」

そう言ったのは、ルーだった。彼女は人狼ルー・ガルーのサヤほどではないが、嗅覚は優れている。

「血ってまさか、王女様が！？」

ゆきなが珍しく慌てていた。元々青白い顔が、さらに青くなっている。ルミアも同じ反応だった。

「サヤ……」

ルーの顔から血の気が引いた。血の匂いに混じって、獣のような匂いがする。こんなところに、他の人狼がいるとは思えなかった。

「サヤ！！ サヤを助けなきゃ！！」

ルーは透き通った羽根をはたかせた。

まさに疾風のような速さで駆け抜けていく。

ルミアとゆきなもキツと顔を上げた。

ゆきなが氷の波のようなものを作り上げる。

「しっかり掴まっててよ、ルミア！！」

「了解よ！！」

氷の波を滑り、いつも走るのとは格段に

早い早さでゆきなは空中を飛んで行った。

全ては、仲間を、家族同然の者を助けるために。

彼女たちは必死になっていた。

「死ねッ！！ ルーン王女！！」

「きゃあっ！！」

きらめく白刃がひるがえる。

叫び声とともにナイフを奮われ、

ルーンはよけきれずに肩を怪我した。

腕の中には、いまだ動かない黒い子狼がいる。

それを手放す訳にはいかず、ルーンはじりじりと後ろに下がった。サヤの血はもう止まっている。

けれど、ぴくりとも動かなかった。

（サヤは絶対を守るッ！）

ルーンはしっかりと子狼――サヤを抱きしめた。

暗殺者に背を向け、サヤに攻撃がいかないように深く抱きしめて彼女を守ろうとする。

暗殺者はナイフを振りかぶった。  
が――。

「させないんだから！」

キンツ、と飛び出してきたルーの能力でナイフがはじけ飛ぶ。怒りに身を震わせたルーは、羽根の色に反して悪魔のようにも見えた。

チツと暗殺者が舌打ちする。

来た時と同じように黒い水にまぎれようとしたけれど、その水がいきなり凍りついた。

「逃がさない！！」

ゆきなだ。無茶なことをしたせいで少し怪我をしている彼女は、ルーと同じように煮えくり返る感情をおさえようもしない。

「よくも、リーダーに怪我させたわね……」

三人目の、やはり怪我を負っているルミアも、怒っていた。怒りのあまり、変身が解けかけて時折、頭にヘビが浮かんで消える。

水に飛び込んだところで凍らされたので、暗殺者は全く動くことができない。

彼はこの依頼を受けたことを後悔したが、すべては遅かった。もう彼女たちは激怒している。

大事な家族を、仲間を傷つけられたのだから。

「安心しなさいよ、殺しはしないわ」

「サヤの痛み、おもいしつて!!」

「許さないから……」

暗殺者の悲鳴は、城中に響き渡ったという。

怪我をしたサヤだが、あずまなぎさ吾妻夙によつて回復術

を施され、ことなきを得た。そして、ギルドに新メンバーが入ったのだ。城が壊滅し、行く所がなくなったルーン姫である。

王直属の依頼もあり、ルーたちとも和解した彼女は、しばらくギルドですぐすことになったのだったー。

## 狙われるじゃじゃ馬姫（後書き）

またまた新メンバー加入です。

少しわがままですが、

優しい目で見てやってください。

## ギルドメンバーの和やかな一日！？

サヤ「ライリーは、一人用の椅子に腰かけていた。

右隣には、いつものようにルイーズ「ドラクルが、

左隣にはルーン姫がいて、大量のケーキをサヤに

食べさせている。サヤは今、訪ねてきたルイア「

ラクレンサと、大食い勝負を開始していた。

ちなみに、彼の両隣りには、ルミアと夕顔がいて、

同じように食べさせている。サヤがまだまだ余裕な

顔をしているのにもかかわらず、ルイアはもう

青ざめ、気持ちが悪そうな顔をしていた。

シオンとエリオットは、あきれたようにそれを見

ている。結局、サヤが勝利した。

「お前さあ、ヒマだよな。ってか仕事いいのかよ、

いい加減あきらめろよ」

「あきらめられるものなら二度と来ないわ！！」

ぎゃあぎゃあと言い合う二人の背後に、

黒いオーラをまとった影がやって来ていた。

巫女の吾妻<sup>あすまぎさ</sup>凧である。

シオンとエレット以外の全員が、

ヤバイ、と思ったが、遅かった。

「あなたたち、食べ物で勝負に使ってもいいのかしら？」

全員が息を飲む。いつものように、悪ふざけに参加

していたはずの夕顔はいなかった。

三人をのぞいた全員は、正座をさせられ説教をされた。

「私、王女なのに……」

「オレはギルドマスターだぜ」

そう二人が言っても、容赦はなかった。

「知っておられないんですか、ここでは、王女も

ギルドマスターも関係ないんですよ」

説教は五時間におよび、全員は足の痛みを訴えていた。彼女の恐ろしさを知らなかったルーンやルイアも、完全にそれを知ったのだった。

大きなアーモンドのケーキを全員で囲み（ゆきな・ル力は休み）、たっぷりとお茶を飲んでから、今日は畑仕事をする事になった。ルイアもまだいるので、サヤとルーは嫌な顔をしていた。

「ギルドに溶け込んでんじゃねえよ。とっとと帰って仕事しろや!!」

「かたいこと言うな、サヤ。今日は二人もいないではないか。私がその穴を埋めよう」

「うめなくていいから帰れっ!!」

にんじんだいこんの埋まった畑の前に、彼らは再びケンカを始めてしまった。

それを放っておいて、他のメンバーは畑仕事を開始する。ルーンはやったことがないので、ルーにやりかたを教えてもらっていた。

獣のような声が聞こえてきたのは、その時である。「な、何これ!?!」

イノシシのような獣が飛び出してくる。その獣は、ルイアに狙いを定めてつつこんできた。

よけそこない、腹に強烈な一撃をくらう。

「ギルドマスター!! 今、回復を……きゃっ!!」

回復の光を出そうとした夙は、イノシシの角で攻撃されてよろめいた。さらにルーの羽根を傷つけ、サヤの髪をひと房斬り落とし、ルーンをかばった夕顔の尻尾に傷を刻んだ。

狂ったように鳴きながら、走り回っている。  
と、サヤがいきなり叫んだ。

「シオン！！ 火！！ 術を使え！！」

「わ、わかった！！」

邪魔をさせないように、サヤはイノシシの  
前にたちふさがった。持ち前のすばしこさで  
逃げ回り、傷をつけられずにいる。

シオンの術が完成した。炎の渦が、イノシシを包む。

悲鳴が上がり、渦が消えると、そこには

一人の少女がいた。

「また、やっちゃった……」

少女は平身低頭謝り、自己紹介をした。

「私、ロツカ」ロツタっていいます。

ギルドマスターの、秘書として任命されました」

「なんで、イノシシに化けてたんだ？」

「野菜の匂いをかぐと、興奮して化けちゃう

体質なんです。ギルドマスターはどこ方ですか？」

全員がルイアの方を指差した。にっこりとロツカが笑う。

何事か彼女が呟くと、縄が現れて彼をぐるぐる巻きにした。

「では、彼は連れて行きますので」

笑顔で彼を引きずって去っていく彼女に、

サヤとルーはちょっとあこがれたのだった。

ギルドメンバーの和やかな一日！？（後書き）

ギルドマスターに天敵現る

の巻です。仕事まったく

していませんから、

ギルド教会から派遣されました。

## じゃじゃ馬姫の初仕事 前編

サヤ<sup>＝</sup>ライリーは、倉木ルカやルイーズ<sup>＝</sup>ドラクール、シオン<sup>＝</sup>エレット、ルーン姫と共に仕事に向かっていた。

初仕事を前に、ルーンはおおはしゃぎである。

サヤたちは呆れたように笑っていたけれど、目は優しくかった。今日の仕事は、薬草探索である。かなり珍しいもののようで、なかなか見つからないのだという。薬草があるという森にやってくると、サヤは班を二通りに分けた。

「ルーとシオンとルーンが一班、オレとルカが一班でいいよな？」

「今のところの実力だと、それが妥当だと思うよ」

「ルーン姫は何か力を使えるんですか？」

話し合いの最中に、ルカは気になつてルーンに聞いた。

力がないのならば、必然的に二人がルーンの守護を

するしかない。負担がかかるのはこの二人だった。

「私は魔女<sup>リトル・ウィッチ</sup>見習だ。あまり強くは

ないが、少しなら術も使えるぞ」

「うう。魔導師<sup>ウィザード</sup>と魔女<sup>ウィッチ</sup>か。戦力にバラつきが出るな」

「リーダー、ルーン姫はこっちの班にしたらどうです？」

「そうだな……」

むうっ、とルーの頬が膨らんでいた。ルーはいつもサヤと一緒にだった。

それが、理由もなしに別々になるなんて、納得できなかった。

「じゃあ、あたしがサヤの班に行く！！ シオンはルーンと一緒にいいでしょっ！！」

シオンが仮面の奥で泣きそうになったことに、ルーは気づいていなかった。

サヤとルカは、彼の体が震えて拳を握りこんでいるので、気づいている。

「私は、シオンでもだれでもいいが……」

「駄目」

ルーンは困惑しながらも了承しようとしたが、ぴしゃりとサヤが遮った。

ルーが泣きそうになり、キツと金色に輝く目で彼女を睨む。

「いつまでもワガママ言うなよ。いつでも、オレと一緒にいられるわけじゃない。」

オレがたまたまいない日に、仕事は受けないって言うの？ そんなの許されるのか？

大仕事だったらどうする？」

いつもの？親友？としての顔ではなく、サヤは？ギルドリーダーとしての？

顔になっていた。厳しい目で睨み返され、ルーはたじろぐ。

もう聞き入れられないと分かり、シオンの腕を掴むとぐいぐいと引つ張って森の中へ入って行った。

「いいんですか、リーダー？」

「たまにはいいよ。サヤサヤってしょっちゅう言われんのも、たまにイラつくことだってあるし。すぐに機嫌は直るからな」

「だといいですけど……」

「うるっさいな。ほら、オレたちも出発するぜ」

ルカはその言い草にムツとなったが、何も言い返さずに歩き出した。不穏な空気を感じ、ルーンが眉をひそめる。

仕事に向かう当初はあんまり明るかった空気は、

すっかり重苦しくなってしまうていた。

うつう、と泣き声が森の中に響いている。

ルーはずっと泣いていた。泣きながらも、シオンの腕は放さない。シオンは少し赤くなったけれど、その理由が

彼のことを好きだからではなく、単に心細いからだを知っているの、すぐに顔を引き締めた。

どんな顔をしようと、仮面をかぶっているから、ルーには気づかれたりしないのだが。

「いい加減泣きやんだら？」

苛立つてきてシオンは言った。ルーはそれを無視し、泣き続ける。せつかく好きな子と一緒になれたのに、と小声で呟き、シオンはため息をつくのだった。

一方、サヤたちはー！。

黙ったまま歩いていった。ルカもサヤも拗ねていて一切口を利かないし、ルーンは気まずくて口を開けない。

と、その時。魔物の咆哮ほうこうが響き渡り、

何匹かの魔物が飛び出してきた。言葉の話せない、野生の魔物である。

三人は慌てて身構えた。

「よっしゃあ、いくぜー！」

先手攻撃を放ったのは、サヤ。少女にしては強い拳が魔物を殴りつけ、悲鳴を上げさせた。

ルーンはすぐに詠唱を始めている。

ルカもキツと顔を上げるなり、魔を祓う巫女の力を使って魔物を浄化した。天邪鬼あまのじゃくの力も

使って、小さな石を巨石に変えて押しつぶしたりしている。

ルーンの術も魔物を何匹か消し炭に変えた。

彼らに危機が訪れたのは、あらかた倒し終えた、その時である。

ひととき大きな声が響くなり、巨大な魔物が現れたのだ！！

咆哮が地面を震わせる。サヤはルーンを抱え、地面を飛びのいた。ルカも慌てて飛びのく。がー！。

ガツンと二人の頭が激突した。彼らは普段陣形を取ることはなく、直前ケンカしていたせいで、何の確認もせずに同じ方向に飛んだのである。

倒れ込んで痛みで顔をゆがめる一人の前に、鋭い爪をつけた巨大な手がせまってきたー！。

じゃじゃ馬姫の初仕事 前編（後書き）

サヤとルカがピンチに陥ります。

ルーンはサヤが守っています。

そして、泣き続けるルーンと

シオンはどうなるのか！？

次回も見てください。

## じゃじゃ馬姫の初仕事 後編

「あぶないっ!!」

ドンツと突き飛ばされ、サヤは土の上に転がった。

慌てて起き上がると、ルカの体を巨大な爪がひっかくのが見えた。ルカはサヤをかばったのである。

「ルカツ!! おい、大丈夫か!？」

サヤは自分の顔から血の気が引いて行くのが分かった。

ルカは肩から血を流して倒れている。

傷は浅いようだったが、血の量がかなり多かった。

「サヤ!! 何してる!! 早く止血しろ!!」

ずっと動かなかったルーンが、慌てたように

ルカに走り寄っていた。白いハンカチを

ルカの傷口にあてがい、それが一面血に染まる。

しかし、血は止まりかけたようだった。

少しサヤに調子が戻ってくる。

「よくもルカを……。オレの家族を傷つけてくれたな」

巨大な爪がサヤに向かって伸ばされる。

サヤは肉薄すると、跳んだ。身の軽さならば、

サヤは誰にも負けない。

巨大な魔物の上に飛び乗り、拳が飛んでくる前に

よけ、相手の力を利用して攻撃を与えていた。

キツとルーンも顔を上げる。

「ルカ!! 私たちもやるぞ!! サヤに加勢するんだ!!」

「了解!!」

ルーンとルカは魔物に向かって攻撃を開始した。

その頃、シオンとルーは。

いまだ口を利かないままだった。

ルーはもう泣きやんでいたが、口を開こうとはしないし、まるでシオンが隣にいないかのようにふるまっていた。妖精のような羽根で、そこらじゅうを飛び回っている。シオンはさみしそうな顔だったけれど、やっぱり仮面をかぶっていたので、気づかれることはなかった。ルーは今、自分のことしか考えていない。サヤに拒絶された、と悲しむことしかしていなかった。「ルー！」

シオンがようやく声を発した。幾分大きな声である。だが、ルーは無視した。シオンが苛立ったように近づいてくる。手を掴もうとしてきたけれど、

ルーはさらに高度を上げて彼が近づけないようにした。「いい加減にしろよ、敵だ！！　ルー！！」

敵なんかない。そう言いかけたルーは、襲い来る爪の攻撃をかわして悲鳴を上げた。山のように大きな魔物が、後ろからルーを狙っていたのである。

さっき、シオンはそれを知らせようとしたのだ。

ルーの顔に悲しそうな顔が浮かんた。

力を使つて一時的に敵を動けなくする。

「ごめんね、シオン、ごめんね……」

「いや、いいよ。仲間だもん……危ないっ！！」

えっ、とルーは声をあげて振り向いた。

巨大な手が彼女に迫っている。

体が大きすぎたため、ルーの力はそのままで効かなかったのだ。

「きゃああああああっ！！」

「よける、るうっううっ！！」

シオンは青ざめていた。愛しい少女が、死の危険に直面している。そのことがかれの心を騒がせた。

そのまま心が命じるままに、彼はその場に飛び込んだ。

仮面がはじけとばされ、バラバラになって破片を飛び散らせる。

だが、シオンもルーも無事だった。敵の爪は、仮面だけを攻撃したのだ。

「大丈夫か、ルー!!」

「う……うん……」

ルーはまともにシオンの顔を覗き込んでいた。こんなことをしたのは、

初めてだ。彼はいつも仮面をつけていたし、一時つけていない時もあつたが、

彼の顔に興味なんてなかったし、こうして見つめることなんてなかった。

彼は、こんなに恰好が良かっただろうか。

ルーは胸が高鳴るのを、どうすることもできなかった。

と、いきなりシオンは目をそらした。顔がひどく紅い。

ルーにはどうしてなのか分からなかった。

「あ、ごめんね、シオン。仮面が……」

「いいよ。仮面より、ルーの方が大事」

二人はお互いに紅くなり、うつむいていた。

だが、二人は完全に魔物のことを忘れていた。

攻撃されて思い出し、慌ててよける。そのさいにルーが腰をぬかして

しまったので、シオンが横抱きにして走ることになった。

「あはははははははは!!」

一方、ルーたちは愕然としていた。

サヤが、いきなり狂ったような笑い声をあげたかと思うと、

鋭い爪で魔物を引き裂き始めたのだ。その顔にも体にも

服にも血が飛び散っていたが、サヤは攻撃の手を休めなかった。

その紅い目は、どこも見ていない。しいて言うならば、敵だけを見つめていた。血の赤と相まって、不気味に輝いて見える。

ル力は初めて彼女に恐怖を感じた。

魔物は苦痛の声を上げ、降参するかのようにその場に伏せる。

だが、彼女は手を止めなかった。ルーンは青ざめたまま動かない。

「駄目……」

ルカは彼女を止めようと走り出した。けれど時遅く、サヤは魔物に爪を突き立てたところだった。心臓部に深く深く刺さった爪は、

血で赤黒く汚れている。

「リーダー……！ サヤ……！ 落ち着いてよ、もうやめて……！」

ルカの呼びかけに、サヤの視線が動いた。ルカとルーンの、青ざめた顔を、その紅い目が移す。

「ルカ？ ルーン？ オレどうしたんだ？」

その目には明るい光が戻っていた。正気に返ったらしい。

と、いきなり悲鳴が上がった。サヤは見てしまったのだ。

血で染まった体中と、死んでいる魔物。自分の爪が突き刺さっているのだから、

自分で殺したのは明らかだった。

その後、四人は再開し、ルーンたちがお目当ての薬草を見つけていたのだ。

帰ることができたけれど、サヤたちは一言も口を利かなかったという……。

## じゃじゃ馬姫の初仕事 後編（後書き）

じゃじゃ馬姫、とタイトルにあるのですが、ルーンがあまり目立ちませんでした。ルーンとシオンの恋愛が一步前進みます。そして、サヤの暴走。次回はシリアスを目指します。

## 番外編・狼少女の過去

サヤ<sup>リ・ガル</sup>＝ライリーは、人狼と、人間の間に生まれた子だった。

その瞳のせいで、禍の目だ、とも言われていた。

サヤは幼い頃から、誹謗中傷<sup>ひぼうちゆうきやう</sup>をぶつけられて

生きてきた。両親はとうにいない。だから、誰もサヤを擁護するものは

いなかった。サヤはいつも一人だった。

半端者、狭間者、ハーフ。サヤのような境遇の者は、そう呼ばれる。

この世界では、妖怪・魔物・人間以外の者は認められないのだ。

「誰が半端モンだこらああああつ！！」

古臭く、今にも崩れ落ちそうな小屋に、少女の怒声が響き渡る。

サヤはここで暮らしているのである。誰も援助などしない。

たまに同情する者がいなくてもなかったが、周りの目を気にして手を貸すことはない。仲間はずれになるのが怖いのだ。

「半端モンのくせに、生意気なんだよ！！」

サヤは威嚇するような唸り声を発した。怒りに呼応するように、黒い獣の耳と尻尾が立ちあがっている。

だけれど、サヤは飛びかかったりはできなかった。

罰を与えられるからだ。こんなのは公平ではないと思いつつも、サヤに反論は許されない。ただ、仕置きがきつくなるだけだ。

それを分かっているから、村の子供たちは増長してサヤを罵る。

「化け物！！ お前なんか、生きている価値ないんだよつ！！」

「そうだそうだ！！ 死んじまえ！！」

子供の一人がサヤに向かって石を投げつけた。

彼女が慌ててかわし、それは別の子供にぶつかる。

「何するのよ！！」

「お、俺のせいじゃないぞ！！ 半端モンがよけるのがいけないんだ！！」

睨まれた少年は、憎しみを込めてサヤを睨みつけた。石がぶつかったせいで怪我をした少女も、キツとサヤを睨みつける。「あんたのせいで私が怪我をしたじゃない！！ なんてことするのよ」

手前勝手な言い分に、サヤはぐっ、と唇を噛んで耐えた。彼女の歯はすべて牙なので、血が口いっぱいに広がる。

俺のせいじゃない。そう言い返したいのに、言い返しても話を通じないから、サヤは言い返せない。

「化け物が私に怪我をさせたわ！！ お父様、早くこいつを痛い目にあわせてよ！！」

怪我をした少女は、村長の娘だった。ホツとしたように息をつく少年が、サヤにはひどく苛立たい。

サヤの心は嵐のように騒いでいた。許せない。こいつらが許せない。

ハーフだと、人間と妖怪の狭間にいるというだけで、罵り、あざけり、石をぶつけるあいつらが許せない。

純血だというのが、そんなに偉いのか？

混血は、何をされてもいいというのか？

サヤは泣きそうだった。彼女は村人と争う気なんかない。

ただ、仲良くしたいだけなのに、誰もそんなことは思わない。

混血でも純血でも悪い奴といい奴は必ずいるものである。

だが、彼らにとっては混血は悪者で、純血はいい奴なのだった。

サヤは憎しみを心に秘めたまま、自分を包囲する子供たちや大人たちを見ていた。抵抗しても、まだわずか十歳の子供では、いくら力がつくても全員にかなう訳はない。

サヤは取り押さえられ、無理やり引きずられるように村長の家に連れて行かれた。

村長は厳めしい顔立ちをした男だが、一人娘を溺愛<sup>できあい</sup>していた。

息子がハーフに殺されたということもあり、誰よりも狭間者を憎んでいた。

「またお前か、狭間者！　今度は何をした！？」

「俺は何もしてねえよっ！！」

ついにサヤの怒りが爆発した。朝から晩まで理不尽な目にあわされれば、

どんな温厚な者も怒るだろう。ましてや、サヤはあまり気が長い方では

なかった。それに、ひねられている腕がすごく痛い。

「あんたの大事な娘に怪我させたのは、ここにいてこいつだ！

俺はちつとも悪くないぜ！！」

石をぶつけた少年が、血の気の引いた顔になるのを見て、

サヤは少し機嫌を良くした。だが、その大事な娘が

証言した言葉に、落胆した。

「いいえ、お父様。この子はハーフに石を投げたのです。

ハーフがよけたから、私が怪我をしたのですわ」

「そうか……」

サヤは身をすくませた。また、痛い目にあわされる。

いつもそうだ。今日も、その例にはもれないだろう。

サヤはいつも今日は違いますように、と祈るのだが、

いまだかつてその願いがかなえられることはなかった。

「あれを持て。こいつには罰を与えねばならんな」

視線の先にいるのは、さっきの少年……ではなく、

やはりサヤだった。今日もサヤの願いはかなえられなかったのだ。

一時間後、サヤはひりひりする体中に、涙を浮かべていた。

鞭で嫌というほど体を打たれたのだ。泣こうが、喚こうがそれは

やまない。それどころが、さらに力を込めて叩かれるのだ。

「……つく。ひつく……痛いよ……痛いよう……」

小屋に戻ったサヤは、泣きながら体に薬をつけていた。

痣がまた増えた。一生、こんな生活が続くのだろうか。

すりむけた箇所が、ずきずきと熱をもつてうずく。

ひよっとしたら、血が出ているかもしれない。

サヤは慎重に背中に触れた。……痛い！！

たえがたい痛みが走る。だが、それ以上に気分が高揚していた。

手にはべったりと血がついている。それを見た時、サヤの

心は高鳴りさえも感じていた。痛みなどもう感じなかった。

その瞬間、サヤの心には野生の狩猟本能が目覚めていた。

本能に身を任せたサヤは、気がつくと、血の海にいた。

今まで自分をいじめた少年や少女たちが、物言わぬ状態で

倒れている。サヤは口も、爪も、牙も、すべて血にまみれていた。

……殺したのは、自分だ。サヤは愕然とした。

子供たちは確かに憎んでいた。だけど、殺したいと思ったことなんかない。

なのに、自分は彼らを殺してしまったのだ。

そこ知れない恐怖と、後悔に身を震わせる少女に向けられた視線

は、

畏怖と殺意が込められていた――。

サヤはもう、大人たちに連れて行かれても抵抗をしなかった。

青ざめた顔のままで、うつむいて歩いていた。

あそこは天国ではなかった。だが、少なくとも、一人ではなかったのだ。

いつも誰かがいた。たとえ、味方ではなくても。

サヤはどこへ連れて行かれるのだろうと思った。

聞いてみても、誰も答えてくれない。やがて、変な匂いのする

建物についたところで、サヤに突き飛ばされるように手を放された。

「人狼と人間の混血だ。いくら払う？」

「……でどうでしょうか？」

「それでいい」

サヤは売られるのだと分かり、胸にちくりと痛みが走った。

何か値段のやり取りをしているらしいけれど、サヤにはお金の単位も通貨も分からないので、首をかしげるばかりだった。

「おい、お前、来い！」

「俺？」

「そうだ！！ さつさと来い！！」

サヤは、それから地獄のような日々を送ることになった。

彼女はあそこでの日々など天国のようなものだったと

思い知ることとなった。サヤが売られたのは、科学者ギルドと呼ばれる集団だったのだ。毎日人体実験が行われ、そんな日々はサヤから生きる気力や笑顔を奪っていった。

作られた薬を飲ませられたり、どのくらいの痛みにたえられるのか、と

拷問の様な目にあわされたりもした。それに、このギルドでは、自ら命を断つことさえも許されない。実験とか以外では、手足を枷で拘束され、檻に入れられて過ごす。舌を噛み切ったりしないように、

口にも枷はされていた。

そんな彼女を救ったのは、ルイーズ<sup>ヴァンパイア</sup>ドラクールだった。

彼女もまた村から売られたのだ。吸血鬼でありながら、

虹色の妖精のごとき翼を持って生まれた彼女は、サヤのようにひどい目に

あわされてきたのである。ほぼ同じ境遇の彼女たちは、すぐに仲良くなり、

共にギルドを抜け出した。いつか、このギルドに壊滅させ、被害者をなくすために、彼女たちは自らギルドを立ち上げたのであったー。

## 番外編・狼少女の過去（後書き）

今回はサヤの過去編です。サヤもルーもひどい目にあわされて来たんです。次回はちゃんと本編に戻ります。また過去編はやりたいと思いますので、今後も見えてやっってください。

## 狼少女と天邪鬼の息子の買物 前編

サヤ「ライリーは、布団を深くかぶって

中で震えていた。あの状況は、小さい頃、

子供たちを殺してしまった状況と同じだった。

何故か、血を見ると頭が真っ白になってしまふのだ。

そして、気づいたら何かを殺している。

怖かった。自分で自分が怖かった。自分の力が怖かった。

誰かを、大事な仲間を傷つけてしまうかも知れない。

そのことが、たまらなく怖い。

「……つく!! もうやだよ……殺したく何て、ないよう……」  
「リーダー？」

サヤはぴたりと泣きやみ、顔を服の袖でぬぐった。今、一番会いたくない相手である。この前の仕事で、サヤはルーンと倉木ルカに

失態を見せたのだった。これ以上の恥をかきたくなくて、必死で泣き顔を見せないようにしている。

だが、声が震えているのでバレバレだった。

「……んだよ、何か用かよ？」

ルカは許してもいないのに、勝手に部屋に上がり込んできた。

サヤはムツとなって殴りかかろうとしたが、まだ涙の痕が残っているのを思い出してぐっところえた。

「泣いてるんですか、リーダー？」

「泣いてねえよ」

「嘘です。声が涙まじりですよ」

サヤは舌打ちした。ルカはいつになく冷静だ。

彼の顔を見たら、また泣いてしまいそう気がして、彼女はいらいらしていた。早くどこかへ行け、と心の中で願う。しかし、ルカは出て行かなかった。

それどころか、サヤが寝ているすぐ隣に座っている。

「出ていけよ。リーダーの命令だぞ」

「いやです」

「出て行って!!……泣き顔見られたくないんだよ」

サヤは怒鳴りつけると、涙でぬれた紅い目でルカを睨みつけた。ルカはひるまず、布団を引っ張ってサヤを引きずりだそうとする。

サヤは抵抗したけれど、力が入らず、ルカに布団を取り上げられてしまった。

「何なんだよ、バカッ!!俺のことはほっとけよ!!」

サヤは子供のように手足を振りまわした。

「エリオットさんに命令されたんですよ。俺は影のリーダーだから言うこと聞けって」

「はあ!? 何だよ影のリーダーって!!」

途端にサヤはふくれっつらになった。ルカは小さく笑い、彼女の鮮やかな髪にそっ、と触れた。サヤはもう抵抗しなかった。

「エリオットさんは、僕の背中を押してくれたんですよ。」

僕が、リーダーが心配なのに行動できなかったから」

「……心配してくれたのか?」

「そうですよ!! あ、でも、僕だけじゃないですよ?

他のみんなも心配してます……」

結局、サヤの紅い目には涙が浮かんでしまっていた。

悲しい涙ではない、嬉し涙だ。サヤは必死で声を押し殺した。

「何だよ、結局泣いてんのか、サヤ」

続いて部屋に入ってきたのは、話に上がっていた、エリオット・アディソンだった。

サヤの髪を乱暴にかきまわし、彼女が悲鳴を上げる。

「ちよっ! 痛い痛い痛いエリオットお!!」

「みんなに心配かけた罰だ。ちゃんと、嫌なこととか心配なこととかあったら、説明しろよな」

「うっせえ!! 言いたくないことだってあるんだよ!!」

「何だと？」

エリオットの目が陰しくなった。サヤの頭に当てた手に、かなりの力が込められる。あまりの痛みにサヤは再び涙ぐんだ。「やめてください！！」

ルカが二人を引き離し、エリオットは舌打ちする。

「何が分かるんだよ！！　ハーフでも何でもないあんたに、何が分かるんだ！！」

サヤの力が不安定なのは、混血のせいだった。

人間と人狼ル・ガルとしての力が、

サヤの力を安定させない。混じり合った血が、最悪の形で作用していた。普通、そういうときは片親が教えるのが常だが、サヤの親はどちらかが教える前になくなってしまった。だから、サヤは血の抑え方が分からないのだ。

エリオットは黙っていた。その顔はどこか悔しげである。

「リーダー外出しよう」

「え？」

「話なら僕が聞きます。僕は、リーダーと同じですから」  
サヤは同じことを言う訳にもいかず、黙り込んでいた。  
言い返すことができない。ルカは最後にエリオットに合図を送り、彼の顔が少し和らいだ。

サヤとルカは、町の市場にやってきた。食べ物・服、何でも売っていた。サヤはひさしぶりの外出に、

笑顔になっている。ルカは少し安心した。

「なんでも買いますよ。何がいいですか？」

この前の依頼で給金をもらっていたので、小金持ちなルカは笑顔で言った。ちなみに、サヤは大食いなので、もらった金はすべてお菓子に変えてしまっていた。

「まだ残ってんのか、すげえなあ」

「一日で使ってしまうのは、リーダーだけですよ」  
仲むつまじげな彼らを見張っている、二つの影があった。  
その一つは、壊れた仮面を手に持っていたー。

ルイズ「ドラクールとシオン」エレットは、  
サヤたちを見張るために外出していた。

ルーは頬をふくらませて二人を見ている。

「ちよつとくつつきすぎよ、二人とも!!」

「あさ、ルー。こういうの、よくないんじゃない?」

付き合わされたシオンは、困った顔をしていた。

この前壊された仮面は、修復がされていなく、  
今日は素顔で歩いている。赤面症なのも相まって、  
顔がひどく紅かった。

「何よ、シオン!! 止めなかったじゃないの!!」

「止めようとしたけど、ルーがさえぎったんじゃないか……」

ルーはどなり返そうと口を開いたが、くらりとなって  
その場に膝をついた。最近仕事ばかりで、一切の?食事?を  
していない。ルーの命の源は、血液なのである。

「ルー!! しっかりしろ!! 血なら僕のをやる!!」

「えっ!?!」

シオンはルーの手を掴み、自分の近くに引き寄せた。

ルーが彼に飛びつき、あらわになつた首筋に牙を突き立てる。  
「う……あ……」

予想外の痛みに、シオンは声を殺しきれずに声をもらした。  
ごくりごくり、とルーが血を飲む音が耳を震わせる。

彼女はただ食事を楽しんでいるだけだ。そう思うのに、  
恍惚としたような目の輝きを見ると、シオンは思わず  
愛しさを感じてしまうのだった。

「ふっつ。お腹一杯……」

と、ルーはようやくシオンから離れた。いつもは青白い

頬が、血液を取ったばかりなので少し赤味がさしている。

「ありがとね、シオン……きゃっ!!」

シオンはぐいっと再びルーを引っ張った。いくら力の強い彼女でも、とっさのことには反応できずに、引き寄せられる。

シオンは彼女の唇にキスをした。

甘い熱が二人を支配する。焼けつくように唇が、体が熱く感じた。ルーはしばらくあまりの心地よさに動かなかったけれど、正気に返ってシオンを突き飛ばした。

「な、何するのよっ、いきなり!!」

「好きだ……」

「何!？」

「ルーが、好きだ……」

ルーは訳が分からなくなった。シオンが、私を好き? ずっと仲間だとは思っていなかったシオンが?

顔が赤らんでくるのがはつきりと分かる。

ルーは泣きそうな顔でシオンを見つめると――。

「おい、ルー!! 返事は!？」

そのまま身をひるがえし、暁の色に似た翼を広げ、逃げ出した――。

狼少女と天邪鬼の息子の買い物 前編（後書き）

ルカとサヤのデート模様は、次回にやります。  
今回は進みだしたルーとシオンの恋愛を  
見てやってください。

## 狼少女と天邪鬼の息子の買い物 後編

サヤ「ライリーは、倉木ルカと共に市場を歩いていた。手にはアイスを持って上機嫌である。

ルカはちよつと苦笑していた。

「リーダー本当にこれでいいんですか？」

「あに？」

サヤは口にアイスを頬ぼつたまま返事を返す。

ルカは完全に呆れて眉をひそめた。

「物を口に入れてしゃべるなって言われませんでしたか？」

そう言った途端、サヤの顔が真っ青になった。アイスを落としかけ、慌てて強く握る。あまりに強い力で握ったので、コーンが壊れてアイスが飛び散った。

「うわっ！！ あああああ…… やっちまった……」

あまりに情けない顔をしてるので、ついルカはくすくす笑ってしまい、サヤに睨まれた。

「笑うんじゃねえよ、ばかつ！！ ばかばかばかつ！！」

「うわっ、いたた！！ やめてくださいよ、リーダー！！」

「うつせえ！！」

サヤはボカボカとルカを殴り始めた。悲鳴のような声上がるが、構わずに殴り続ける。

彼女の顔は髪の色と同じくらい真っ赤だった。

べつたりとアイスが服につき、ルカはかなり情けない顔である。

それを見ると、サヤの機嫌は少し直った。

「手がべたべたしやがる。洗いに行こうぜ、ルカ」

「僕の服がべたべたなのは、リーダーのせいなんですけど？」

ルカは珍しく低い声で言った。少し怖くなり、サヤは必死で謝る。二人は服と手を近くの水場で洗い、また市場に戻ってきた。

「リーダー、行儀が悪いって怒られたことでもあったんですか？」

「うん…… なぎが、な……」

なぎとは、ギルドメンバーの吾妻<sup>あずまなぎさ</sup>凧のことである。

礼儀や行儀には厳しい彼女は、サヤのもっとも恐れる人なのだった。

「ああ、凧さんですか。あの方は厳しいですよ」

ルカも苦笑したように言った。サヤはこくこくと頷きながらため息をつく。本人が聞いていたら、きっと怒られただろう。

「なあ、ルカ」

悲しげな声でサヤが言ってきたのは、そのすぐ後だった。

ルカも悲しそうな顔になり、黙っている。

「俺が落ち込んでるなんてらしくないよな？ でも、聞いてくれるんだろ？」

ルカ。お前と俺は同じなんだから……」

立場も状況も違うけれど、ルカとサヤは同じハーフだった。

人間と妖怪の狭間の者。

「はい……話してくれますか？」

「俺、前も同じことがあったんだよ。頭が真っ白になって、気が付いたら、いじめっ子殺してた……血が駄目なんだよ俺」

サヤはなるべく何でもない事のように言おうとしていたけれど、その目は涙でうるんでいた。痛いくらい握りしめられた拳が、なんともいたたまれない。

「俺、怖いよ……誰かを傷つけちゃうのが怖いよ……」

震えがまじった声は、ひどくか細くて、ルカはなんと言っているのか

分からなくなった。ルカは血を抑えきれないようなことに陥ったことなんてない。

「仲間を、皆を傷つけちゃうのが怖いんだよ……」

ルー・シオン・凧・ゆきな・エリオット・ルミア・ルーン・夕顔。そしてルカ……。サヤにはたくさん仲間がいる。

その誰も、傷つけたくななんてない。

それがサヤの心からの気持ちだった。

ルカは思わずサヤを抱きしめていた。サヤは驚いた顔をしていたが、

抵抗はしない。優しい声でルカは言った。

「僕がリーダーを……サヤを、守る。誰も傷つけないように、絶対に守って見せる」

「本当に、守ってくれるのか……？」

サヤは涙の混じった声で言った。背中に回された腕は、かなり温かい。

頼ってもいいのだろうか。サヤはひどく悩んでいた。

強くならなければいけなかった。石を投げられ、悪口を言われ、いじめられ続けてきた。だから、男言葉ばかり使ってわざと

乱暴な物言いや言動をしてきた。でも、ルカがいればそんなことしなくてもいいのだろうか。もう、無理しなくてもいいのだろうか。

「命に変えても守ります……」

涙をこぼすと、サヤはルカにしっかりと抱きついた。

狼少女と天邪鬼の息子の買い物 後編（後書き）

サヤとルカの距離が近づきます。  
まだまだサヤは恋愛にはうといので、  
そういう関係ではありませんが。  
次回も見てください。

## 狼少女の想い

サヤ「ライリーは、せっぱつまったような、怒られる子供のような顔をしてギルドに帰ってきた。倉木ルカも一緒である。」

サヤは同じギルドメンバーのエリオット「アディソンに言ったことを後悔していた。」

かなりひどいことを言ってしまったのだ。

「リーダー、僕が代わりに謝りましょうか？」

「ううん、俺が行く……」

サヤの顔は青ざめていたが、決して逃げたりはしなかった。

その代わりのように、

ずっとルカの手を握って

震えていたけれど。

もちろん怒られるのが怖いからではない。

彼に嫌われるのが、拒絶されるのが怖いのだ。

「あ、エリオット……」

と、そこに当の本人がやってきた。

まっすぐにサヤを目指して歩いている。

サヤはびくつ、と身をすくませ、

握った手に力が籠った。

ルカは手が痛くなっただけで、その痛みにたえて動かなかった。

「え、エリオット、あの……」

「サヤ……」

二人はしばらく見つめ合った。お互いに動かず、時間ばかりが

過ぎていく。と、二人は

同時に口を開いて言葉を発した。

「ごめんっ！！」

サヤたちは驚いたように

再び見つめ合った。

「え……？」

二人はお互いに譲り合うような行動を見せた後、何度か言い合いになり、結局サヤが押し切られて話をする事になった。

「ごめん、エリオット。俺、

言いすぎた。俺のために

思ってくれた、って分かってたけど」

紅い目が水分を含んで潤む。

ル力の手を握る手の力が弱まり、

慌ててル力は少し力を込めた。

「俺も悪かったよ。無神経だった。

俺、ハーフじゃないもんな。

お前の気持ちなんて分かる訳なかった」

サヤは何も言わずに首を振った。

目から流れた涙がポタポタと

床に吸い込まれていく。

「そんなことない、そんなことないよ」

こうして二人は仲直りすることができた。

一方、魔導師ウィザードのシオン「エレットは……」。

落ち込んでいた。ルーことルイズ「ドラクルは部屋にこもって出てこない。水とごはんだけを夕顔が差し入れて、後は放っておいてあった。」

エリオットとサヤが無理やり部屋から

出そうとしたところ、振り返ちにあつたのである。

「ルー……」

シオンは彼女に口づけし、自分の想いを告げた。

だが、彼女はその日から部屋にこもってしまったのだ。

呼んでも扉を叩いても出てこない。

食事は少しは減っていることから、生きているとは思うが……。それでもシオンは心配だった。

そこで、シオンは自分の術を最大限に

利用してルーの部屋の窓からの侵入を試みた。

シオンの最大の技、空中浮遊。

鍵はしまっていないかったので、シオンはあっけなく部屋に入ることができた。

「すう……すう……」

部屋の主は健やかな寝息を立てながら眠っていた。何かいい夢でも見ているのだろうか、その顔はどこか嬉しそうだ。

「シオン……」

シオンのはぎよつとしたように

窓辺によりかかった。バレたかと思ったが、

彼女はまだ目を覚ましていなかった。

彼の名前を呼んだのは、寝言だった

ようである。シオンは紅くなり、

かわいらしい寝顔をながめていた。

とー。

「んー？ サヤ？」

手が伸びてきたかと思うや、

それはシオンの体を引き寄せて

ベッドに倒れ込ませた。

シオンは逃げようと試みたが、

あまりに力が強くてできない。

寝ぼけている彼女はすっかり

親友のサヤだと思っっているらしく、  
シオンを放してくれるきざしさえ  
なかった。ドキドキと鼓動が速くなる。

すぐ横に、彼女の顔と体があり、  
今シオンは彼女に抱きしめられて  
かなり密着している状態なのである。

（るうつうつうつ。しっかりしてくれよ  
僕はサヤじゃないんだあああつ！！）

思わず心の中で叫ぶけれど、もちろん  
彼女には届かない。

と、その時だった。

「くしゅんっ！！」

ルーがくしゃみをしたのである。

目が開き、その目が一点を見つめた。

「きゃああああああああつ！！」

大絶叫が響き渡り、シオンは無情にも  
ベッドから蹴り落とされ、しかも顔に  
平手打ちまでされた。

「最低！！ 何してるのよ、馬鹿っ！！」

「引き込んだのはルーの方だぞ！！」

サヤと間違えて僕を……！！」

「勝手に部屋に入ったのは誰！？」

「うつ。それは……」

ルーはそこで、はあはあと息を  
切らせてしまっていた。最低限の  
食事しかしていなかったのだ、  
体力がもたなかったのだ。

「でも、心配だったんだよ」

「シオン……」

ルーは少し気分をよくして、  
ベッドから起き上った。

ずっと彼のことを考えていたのだ。

ルーにとって彼は友人であり仲間で、

一人の少年として、異性として見たことなど  
なかった。その彼がいきなり告白してきたのだ。

かなり悩み、ルーはその答えを導き出したのだった。

「私、シオンのこと仲間としか思ってたなかった。

だけど、シオンの気持ち嬉しかったし、

まだ分かんないけど、付き合ってみる？」

「はああっ!？」

気の抜けたような声を上げたシオンは、

じろりとルーに睨まれたが、それも

無理はなかった。まるで一緒に買い物でも行く？

と聞くかのような気軽な気持ちで言われたのだ。

「何よその反応!！」

「ふつうはそう返すだろ!! 何でそんな何でも  
ないような声で付き合うとか聞けるんだよ。

馬鹿だろお前馬鹿!！」

「バカってなにようっ!! 好きとかって

よくわかんないんだから仕方ないでしょっ!!

だいたいシオンがもっと早く言わないから!！」

「人のせいにするな!！」

真っ赤になりながらもお互いを罵りあう姿を、  
サヤたちはほほえましそうに見ていた。

## 狼少女の想い（後書き）

投稿するのに時間がかかって  
すみませんでした。

シオンたちの恋愛も少しずつ  
書いてく予定です。

## 科学者ギルドを探せ

その日はいつものように始まった。

ギルドリーダーであるサヤ「ライリーは、あくびを噛み殺しながら食卓についた。

夕顔が笑顔でその前に少し冷ましておいたスープを置き、寝癖がついていると吾妻夙あすまなきが注意をして嫌な顔をされる。

「おはようございます、リーダー!!」

倉木ルカが笑顔でやってきた。

少しだけその顔が赤くなり、サヤは小声でおはようと返す。

エリオット「アディソンがそれを

からかい、さらに紅くなった彼女に殴られた。

「おはよう……」

シャワーを浴びたばかりなのか、花の匂いを

そこここに散らばらせているルイズ「ドラクール、同じような匂いのルーンとルミアも入ってきた。

シオン「エレットはまだ起きて来ていない。

彼がそろえば全員なのだが……。

「ルー、シオン知らないか？」

ルーに聞いてみたが、彼女は首をかしげるだけだった。

いつもはもう起きている頃なのに、と夕顔がふくれっ面である。

と、扉が乱暴に開けられ、入ってきたのは、

当のシオンだった。服が血に染まっていることに気付き、ルーが当惑しながら立ち上がる。

だが、シオンは手を振って自分の血ではないと示した。

「大変だ!!! また、『科学者ギルド』の被害者が出たんだよ!!!」  
良く見ると、シオンは二人の少年と少女を抱えていた。

血はどちらかのものなのだろう。

夙が慌てて近寄るなり容体を見た。

かなり真剣な顔が、しだいに和らいでいく。

血の量はかなりあったが、命に別条はないらしい。

「シオン、何があったのか、話してくれよ」

血をぬぐった後夙が止血し、少女たちはルーとサヤが使っていない部屋に運び込み、血にまみれた服は夕顔今現在洗濯している。

着替え終わったシオンは、サヤに問われて口を開いた。

「僕は朝早く起きたから散歩に行ってたんだよ。」

そしたら、この子たちが森に倒れてて、『科学者ギルド』の名前を口にしてた。だから連れ帰ったんだよ。

それ以上のことは分かんないよ、僕にも」

シオンは自分の知っていることすべてを話した。

怪我をしていたことも、そのギルドの連中と

何があったかもわからないらしい。

「また、何かやらかしてくれたのね、あいつら……」

ルミアが憎々しげにそう言った。全員も同じ反応である。

当然だ。全員が、そのギルドの被害者なのだから。

特にサヤの反応は今にも倒れてしまいそうなほどだったが、ル力が手を握ってやると落ち着きを取り戻した。

ルーはその様子を見ても、もう嫌な気持ちにはならなかった。

「ちくしょう……こんな小さい子まで被害者に仕立てるのかよ」

エリオットの舌打ちがその場に響く。いつもならそれを

咎める夙も、今日だけはそれを叱ったりしなかった。

「あの……」

か細い声が聞こえてきた。ぎよつとなり、扉の方を見ると、

髪を二つ結びにした女の子がよろよろとしながら立ちあがっていた。

隣には少年もいて、同じくふらふらな様子である。

「おい、まだ寝ているよ」

サヤは眉をひそめると、少女たちに幾分乱暴に言った。  
少女は首を振り、体をささえる杖をさらに強く握った。

「ここ、ギルドなんですよね！？　お願いです！！  
私の友人を助けてください！！　お願いです！！」  
珍しい黒髪がしゃべるたびに揺れ動く。

同じ色の目には涙がたまり、切羽詰まった様子で  
少女は叫んだ。少年の方も、武器で体を支えていて  
こちらまで歩み寄ってきた。

「お願い、アニタの依頼を受けてください！！  
……　お金はあまり、ないけど、働いて返します！！  
どうか、助けて僕達の友人を！！」

言った後で、ふらついて二人はルーとサヤに  
抱き起こされた。かなり急いでいる様子である。

「何があつたのか、話してくれるか？」

「依頼を受けてくれるんですね！！」

アニタと呼ばれた少女の顔が輝いた。

サヤが黙って顎を引き、少女と少年を椅子に座らせる。

洗濯を終えて戻ってきた夕顔とシオンが

お菓子とお茶を出したけれど、二人は口をつけなかった。

「私たちは、奴隷じゆうです。妖怪と人間の間の子と  
して生を受けました。その友人は、純血です」

アニタはためらいがちに話し始めた。

サヤの顔から血の気が引き、ルカが慌てて手を握る。

「僕たちは実の親からギルドに引き渡されたんだ。

だけど、そのギルドはひどいものだった……。

僕達は殺されそうになって逃げてきたんだ」

その後は少年が話した。名前を聞いたところ、

少女がアニタ・リスキール、少年がイルク・タルデアというらしい。

ちなみに、アニタは魔女と猫魔まじゅうの子供、イルクが  
人間と妖狐との間の子だった。

そして、純血の子は珍しい天使族だという。

天使族はるか昔に滅びた文明の生き残りだ。

ハーフはともかく、まだ純血がいたとは。

「その子は売られたらしいの。私たちが来た時にはすでにいたわ。

その子、純血だけど私たちに優しくかった。差別なんて、しなかった」

差別されて当然だと思って生きてきたのだろう。

サヤは自分の過去とアニタたちの姿がかぶり、ひどく同情的な気持ちになった。

「あんないい子があんなひどいところにいるなんて、駄目だよ。

彼女は僕達を助けてくれた。だから、今度は僕達が彼女を助けたい

！！」

サヤは全員を振りむいた。決意に満ちた瞳が見つめてくる。

まだ正直怖い。だけど、仲間がいる。いつまでも逃げていてはダメだ。

絶対にあんな記憶、乗り越えて見せる。

「『ホラーギルド』はその依頼、しっかり受け取ったぜ！！」

サヤの言ったことを聞くなり、安心したのか少年たちは

気を失うように眠ってしまったー！。

## 科学者ギルドを探せ（後書き）

再びギルドの被害者が現れた。

サヤたちはギルドの本部に

乗りこむ決意を固める。

新章突入です。

次回もよろしく願いします!!

## 科学者ギルドの居場所を特定せよ

サヤ「ライリーたちは早速行動を開始した。

ルーンとエリオット「アディソンが護衛と見張りとしてギルドに残ることになっていた。

ルーンはそのギルドに恨みを持っていないことと、第一危険だからで、エリオットは何か会った時のための待機メンバーである。

ルーンは最初渋ったけれど、自分の力がそんなに強くないことを知っているので涙目になりながらも無理やりついてくることはなかった。

サヤは倉木ルカと行動を共にし、ルイーズ「ドラクルはシオン「エレット、吾妻<sup>あすまなぎさ</sup>夙はルミアと夕顔と一緒にだ。

地図を調べ、今までやつらがいた場所を調べ、それでも居場所は見つからず、彼らは苛立っていた。

「ちくしょう、科学者ギルドのやつらああっ!!」

<sup>ほ</sup>吼えるような声を上げたサヤは、一旦

ギルドに戻って食事を取っていた。

他のメンバーもかんばしい結果は得られなかったらしく、うなだれたような顔で食事を頬ばっている。

「俺も手伝うか？」

エリオットが言くと、嫌な顔をしたサヤが首を振った。

「お前はあの子供たち見張ってるよ。何するか分かんねえぞ。大切な人らしいからな」

「でも、疲れてるみたいだしな。変わるか？」

「いいつつつてんだろぅが!! お前はここに残れ!!」

以上!! はい、これで終わり!!」

ムツとしたようにエリオットが睨みつけた。

サヤも苛立っているので睨み返す。

不穏な空気に、ルーの金色の目が潤み始めた。

シオンがなぐさめるように髪をなで、

夙が二人の頭にげんこつを落とす。

「……いつてええっ！！」

涙目になる二人に、夙はきつい目を向けた。

「争っていても何にもなりませんわ。」

時間の無駄です」

事実なので、サヤたちは文句を言えずに黙った。

そこに、か細い二つの声が届く。

「あの……様子はとうですか？」

「見つけられました？」

アニタ「リスキールと、イルク「タルデアだった。

期待に輝く目が、サヤが首を振った瞬間曇った。

サヤがため息交じりに説明する。

「悪いけど、まだ見つけられてないぜ。」

「けど、絶対に見つけて見せる。安心しな」

「僕達、場所を覚えていきます！！ ご案内しますよ！！」

イルクが熱のこもった口調でサヤの手を握ってくる。

サヤの手からスプーンが落ち、からんと涼しげな音を立てた。

明らかに眉がしかめられた。

「あのな、あいつらは同じ場所に長くいることはねえんだよ。」

同じ場所にいるんなら、俺たちがあんたたちみたいな被害者が出ないうちにやつらの組織壊滅させてるさ」

そう、このギルドのほぼ全員が恨みを抱いているのに

かわらず、見つからないのはそのせいである。

イルクの目に涙がたまり、アニタも青ざめた顔で立ち尽くした。

「そう……なんですか」

サヤの手を握る手に力が籠った。それでも、サヤは優しく

手を放してやる。ルカに差し出された新しいスプーンを握り、

サヤは再び食事に戻った。

こんな時に食事をしていていいのか、と思うなかれ。  
食料補給は大切なのだ。接種しなければ、倒れてしまう。

食料補給しなくてはハードな仕事などできないのだ。  
おいしいパンやスープや肉料理。

いつもの通りの最高の味の料理を、全員はかきこむように  
食べていた。砂でも食べているかのように味など感じない。

ただ食料補給のために食べているだけだ。

楽しむ余裕など今はなかった。

「ごちそうさま……」

サヤは食べ終わると、ナプキンで口元を拭いて立ちあがった。  
ルカがぎよつとしたように慌ててパンと肉を口に放り込み、  
せき込みながら水で流して立ち上がった。

「ゆっくりでもいいのに。俺一人で行くから」

「いいえ、僕も行きます!!」

二人は連れ立って外に行こうとした。

が、いきなり扉が開いたので驚いて後退した。

入ってきた人物を見るなり、サヤは敵意むき出しの視線を向ける。

ギルドマスターのルイア「ラクレンサだった。

「てめえ、何しに来た!! 俺らは今忙しいんだよっ!!」

「迷惑ですので帰っていただけませんか!!」

ルカの言葉に、ルイアはムツとしたように

彼を睨みつけた。何か言いかけた時、

彼を突き飛ばすように少女が現れた。

「大丈夫ですよ、ギルドマスターは仕事をしに来たんですから」

それはギルドマスターの秘書をやっているロツカ「ロツタだった。

「あんだ、この前の……」

「ロツカ」ロツタです。……ルイア様、仕事しないなら今すぐ

帰っていただきますよ。書類がたまっているんですから」

「……分かったよ」

舌打ちをした彼は、ためらいがちにサヤを見つめた。

「『科学者ギルド』の居場所を知りたいか？」

「はあ？」

サヤは一瞬何を言われたのか分からなかった。

思わず気の抜けた声が出たくらいである。

「私たちはスパイをそこに向かわれてあるんです。

彼らはよく働いてくれますよ。……こっちのギルドマスターとは大違い」

「ロツカ、てめえっ！！」

あまりにもサボリ癖に悩まされているのか、

ロツカは最後に批判を混ぜることを忘れなかった。

睨んでくる彼を無視し、サヤの紅い目を見つめる。

「どうですか、リーダーさん？ 行きますか？」

サヤは迷うように目を泳がせた。『科学者ギルド』に行く。

それは、過去を呼び起こす行為だ。

どくん、と胸が高鳴る。

冷汗が体から流れ出す。怖い。だけど、行かなくてはならない。

これ以上の被害を出さないために。

と、温かい手が自身の手に添えられた。

「サヤ、大丈夫だよ」

ル力だった。彼の手は本当に安心する。

「行く。あいつらを許してはおけない」

しっかりとした声を聞き、ロツカはにっこりと

笑いながら主に説明を促した――。

## 科学者ギルドの居場所を特定せよ（後書き）

ルイアとロツカ再登場です。

そして、だんだん決意を固めていくサヤ。

確実に『科学者ギルド』を追い詰めていきます。  
次回もよろしくお願いします。

## 科学者ギルドに乗り込め

サヤ「ライリーは真剣な顔で話を聞いていた。

ロツカ「ロツタはきはきと話し、その後でギルドマスターであるルイア「ラクレンサを見やった。

「教えてくれよ、どこにあるんだ!？」

焦ったようにすがりつく彼女に、ルイアはあくまで冷静な笑みを向けていた。その態度に腹が立つものの、サヤは我慢するしかない。

「ただでは駄目だな」

「なっ……!？」

ルカの眉がつりあがった。まあまあとシオンがなだめる。サヤも怒りで拳を震わせていた。

(足元見やがって……!!)

「ギルドマスター!!」

ロツカが牙をむき出した狼のように怒り、片手を高く上げて魔術の準備をし始めた。

ルイアはそれをかき消し、彼女の眉を吊り上げさせた。

「落ちつけよ、ロツカ。人に何かしてもらいたいと思ったら、何かしらの代価は必要なものだぜ?」

「……分かった」

サヤはゆっくりとためらいがちに近づき、

ルイアの男にしては細い手をきゅっと握った。

彼の頬が赤くなり、全員の責めるような視線が突き刺さる。だが、次のサヤの行動に彼に同情が集まった。

「デートでもなんでもする。だから、教えてくれ」

きらきらと目を潤ませてサヤは演技を始めた。

余談だが、隠し持っていた目薬をさしたのに気付いたのは、ルカとエリオットとシオンだけだった。

（こいつ、人の好意を完全に利用してやがる……！！）

エリオットとシオンは思わず彼に同情した。

サヤはさらにルイアに抱きつき、上目づかいで見つめる。

「わ、分かった。話してやろう！！」

（よっし！！）

ルカは演技だと分かってても頬を膨らませるばかりだった。

ついに科学者ギルドの場所を教えてもらった『ホラーギルド』。

彼らはエリオットとルーンを、アニタたちが勝手に動かないための監視とギルドの護衛のために残し、居場所に彼らのアジトに乗り込むのだったー！。

「ま、また僕女装！？」

今にも泣きそうな声が古びたビルの外で響いていた。

ルカとサヤはこのギルドに顔が割れている。

なので、今現在、サヤは男装、ルカは女装をしていた。

サヤは髪を黒いキャップで隠して短く見えるようにしていて、黒い上着に紅のズボン姿だった。

ルカは髪の色と同じかつらをかぶらされ、淡い色のワンピース姿だった。目がうるうると潤み、

可憐な女の子のように見える。

（やばい、かわいい……／＼／＼）

女であるはずのサヤでさえ思わず見とれてしまった。

しくしくとすすり泣く様子はまことに儚げである。

「行こうぜ、ルカ。仕方ないだろ？」

「うえええっ、リーダーあああっ！！」

「馬鹿！！リーダーって言うな！！」

俺のコードネームはツルギだってば！！」

サヤ「鞘」剣（けん）という連想からのあだ名である。

ルカはミコという名前で入ることになっていた。  
ルカのコードネームはサヤより簡単で、

親が巫女だからである。

それぞれが男装&女装をしたりして、  
ギルドメンバーは乗り込むことになっていた。  
ロツカとルイアも乗り込むらしい。

「よし、行くぞ、ミコー!」

「わ、分かりました、ツルギ……」

キツと睨みつけてくるツルギことサヤに、  
ミコことルカは腹をくくって歩き出したー。

## 科学者ギルドに乗り込め（後書き）

スランプに陥り、少し執筆が遅れてしまいました。

次回もよろしく願います。

次のお話は夙の過去編です。

## 巫女の少女は悪夢を見る

あずまなぎさ  
吾妻夙は巫女として生を受けた。

生まれつき巫女の彼女は、誰からも愛されていた。

だけど、そんな彼女には仲間が、友達がいなかった。

誰もが彼女を巫女様として扱い、よそよそしい態度ばかりを取っていた。実の親でさえも、彼女を実の娘として扱ってはくれなかった。

だから夙はいつも一人だった。

そんな時、出会ったのがエリオット「アディソン」だった。

彼は夙と彼女を呼んでくれた。「様」がついていたけれど、

巫女ではなく夙として、一人の少女として彼女を扱ってくれた。

夙は過保護すぎる嫌いはあるけれど、だんだん彼に魅かれていった。もう一人ではないと、心から思えたのだ。

だが――。

悲劇は唐突に起こった――。

その日、夙はいつものようにたずねてくる村人たちに

占いの結果を教えたり、指示を出したりして過ごしていた。

隣にはエリオットがいて、水やタオルを差し出してくれる。

夙は安心して仕事に熱中することができた。

エリオットがいるならば何の心配もない。

食事の用意も、女官たちや神官たちの手配も彼がやってくれていた。

「エリオット、いつもありがとう」

夙はにっこりと笑うと、人の切れ間に彼に語りかけた。

いつも話しかけたりはしない少女の言葉に、彼は驚いたような顔をしたが、やがて笑うとこう言い返した。

「仕事ですから、当然のことですよ、夙様」

「それでも嬉しいのよ。私は、あなたがいるから

何の心配も不安も感じなくて済むのだもの」

エリオットの頬が赤く染まった。

しかし、慌てたようにすぐ目をそらしてしまった。

巫女の護衛役兼神官の彼は、巫女に対して感情を持つてはいけないとされている。

夙はまた人が来たので、それ以上彼と話すことができなかった。

「巫女様、そろそろ食事の時間ですよ」

人が来なくなつて数分後、女官長として長く務めている老女が彼女に声をかけると、壊れ物でも扱うかのように優しく腕にふれ、彼女を食堂に連れて行った。

食堂とはいつても、彼女だけが使うことを許された個人だけのものだった。

豪華な作りで長いテーブルがあるのだけれど、一人だけしか座らないのでスペースがかなり余っている状態だった。

「夙様、お手を」

「はい」

エリオットに声をかけられ、夙は日の光を浴びたことのない白い手を差し出した。

華美な装飾を施された椅子に腰かけさせられ、すつ、と椅子が押される。

「……ありがとう、皆。エリオット以外は下がっていいわ」

『わかりました、巫女様』

女官たちがゆるやかに部屋を退出した。

彼女たちも夙に理解がある者たちだった。

同じ年、もしくは母、祖母のような年齢の者たちである。態度には出さないが、

温かい気持ちのようなものを抱いているのだろう。

エリオットは苦い顔をしながらも、夙が

一緒にテーブルについて欲しいと頼むと

断ったりはしなかった。

今日もおいしい食事を食べながらエリオットと話す。

それだけなら、いつも通りだった。

それなのにー！。

「きゃあああああつー！！」

「狼藉者！！　巫女様には指一本……」

いやあああああつー！！」

響いたのは、女官たちの悲鳴だった。

青ざめた夙は立ち上がり、部屋を出て行こうとする。

「夙様！！」

「放して！！　助けなきゃ！！」

しかし、エリオットが腕を拘束して動けないようにした。

夙は暴れ、衣装が少し乱れる。

それでもエリオットは手を放さなかった。

手を放したら、この勇敢にして無鉄砲な巫女が

飛び出していくと分かっているから。

「彼女たちの死を無駄にはしないでください。

ここには鍵がかけてあります。

しばらく動かないでください」

「まだあの子たちは死んでない！！　死んでいるかどうか

なんて分からないじゃない！！　早く鍵を開けて、

私が駄目なんだったら見に行つてよ、エリオット！！」

「もう駄目です。悲鳴や息遣いさえも感じられない。

彼女たちは死んだでしょう」

「そんな……」

夙は力が抜け、エリオットに抱きつくかのように倒れ込んでしまった。エリオットは一瞬紅くなり、

そしてそんな場合ではないと思い直して  
彼女を支えた。

夙は頭の中を黒い感情がよぎるのを感じていた。  
彼女たちが何をしたというのだ？

……何もしていない！！ 何も、  
していないじゃないか！！

彼女たちの罪のない命を奪った者たちが許せない。

殺すのなら、私を、巫女である私だけを殺せばよかったのに。

「いけない、夙様！！」

彼女の変化に気づいてエリオットが彼女を揺さぶろうとする。  
だが、それよりも前に夙が彼を強い力で突き飛ばしていた。

壁に叩きつけられ、呻くエリオット。

夙は無表情でそれをいちべつすると、鍵のかかっているはずの  
扉に手をかけ、いともたやすく扉を破壊してしまった。

狂気が、燃えたぎる怒りが彼女を支配している。

夙はそのまま部屋の外に飛び出した。

そこには、死体がごろごろと転がっていた。

女官たち、神官、神官候補生、無差別に何人も殺されていた。

「何で、こんなひどいことを！！」

「おや、巫女様。ようやく覚醒ですね」

「覚醒！？」

「あなたは闇の巫女とおなりになったのですよ。  
実験は成功のようだ」

「実験！？ そんなことのために……」

そんなことのために皆を殺したのか！！」

夙はにこにこ笑っている男に掴みかかり、  
首を強い力で締め上げた。

男の顔が苦しげなものに変わり、  
手を叩いてくるが夙は力を緩めない。

「夙様、駄目です！！ このままでは、あなたは

本当に闇に染まってしまっ！！」

エリオットが取り押さえたため、夙は泣きながら身をよじってなお男を殺そうとしたが、

男は恐怖を感じたのかそのまま逃げてしまった。

彼女に残されたのは、エリオットと自分自身。

そして、男が忘れて行った『科学者ギルド』の名刺だけだったー！。

その日から、復讐を誓った彼女はそのギルドと

対立しているらしい『ホラーギルド』にエリオットと

共に入り、組織を叩きつぶすため、できることなら

何でもやった。力はそれほどなかったので、

情報収集につとめた。

闇に染まりかけた彼女は、もう清らかなる巫女ではない。

実験のため、ただそれだけのために大事な人達も、自分の将来さえも犠牲

にされてしまったなれの果てだったー！。

**巫女の少女は悪夢を見る（後書き）**

今回は夙の過去編です。

闇の巫女にするための実験。

ただそれだけのためにすべてを

失った彼女。

次回は本編に戻って話を進めます。

## 科学者ギルドの潜入者たち

サヤ「ライリーは恐怖を必死でおさえながら歩いていた。片手は倉木ルカが握ってくれているけれど、死にたいと思うほどの実験を繰り返されたサヤにとっては、ここはひどく苦痛な場所だった。

「サヤ。大丈夫？」

「大丈夫……」

ルカに聞かれ、サヤはカラ元気で笑って見せた。彼はそれ以上聞かず、黙って歩き出した。

サヤはその動きに合わせるように彼に続く。不安な気持ちはあとからあとから湧いてきて、サヤは平静ではいられなかった。

ルカは何も言わずに彼女の手を握っている。そのことが、サヤはかなりありがたかった。

一方、ルイーズ「ドラクールと、シオン」エレットも活動を開始していた。

手をつなぎつつあたりを見回しながら歩いている。誰かに見つからないようにと、かなりの神経を使っていた。見つかったらどんな目に遭わされるか分からない。

今は夜中である。外出禁止と言う訳ではないが、闇に乗じて指示なしに勝手に動く連中がいるというのを、二人はサヤに聞いて知っていた。

「ルー、怖くない？」

「シオン……が、いるから、大丈夫……」

そう言いながらも、ルーの顔はひどく真つ青だった。必死で恐怖を抑え込んでいるのだろう。

開いた片手できゅっと彼の服の袖を掴んでいた。

シオンもそうだが、ルーもここの被害者だ。  
怖くて当然だろう。

と、握っていたライトの明かりが、チカチカと  
点滅し始めた。シオンは舌打ちし、それをその場に  
放置しようとする。

とー。

「貴様ら、そこで何をやっているー!!」

「っっ!!」

何者かに見つかってしまった。

眩しいライトが二人を照らし出す。

ルーは泣きそうになったが、

シオンはなんとか冷静な顔で彼に話しかけた。

「私たち、迷ってしまったんです。

部屋が分からなくなってしまったて……」

ただいま女装中であるため、

なるべくかわいらしく見えるように

目を潤ませてみる。

しかし、男の表情は不気味な笑みの

ままであった。簡単に色仕掛け(?)に

引っかかるような人物ではないらしい。

「本当だろうな？」

「ほ、本当、です」

今度はルーが口を開いた。

その体が震えているのを見て、男は

口元をゆがませて持っていた鞭を振りまわす。

「じゃあ、何で震えてるんだ？」

本当ならそんな必要ないだろう？」

「この子、気が弱いんです。

いきなりあなたがやってきたから、

怯えて……ひゃっ!!」

鞭で手を叩かれ、シオンは慌てて身を引いた。  
ルーの目がさらに潤み、体の震えが激しくなる。

「な、何をするんですか!!」

「嘘ついてるんじゃないよ。何を探っている?」

二人の顔が青ざめた。まさか、潜入捜査がバレた!?  
すわ任務失敗か、と慌てる二人に、

男はきつい口調で言い放った。

「出口を探してるんだろう? 逃げようったってそうはいかねえぞ!!」

(よかった……バレてないみたい……)

(バレてはないけど、このままじゃやばいな)

ルーはすっかり安堵しきっていたが、シオンはこのままでは痛い目にあわされるのではないかと心配していた。きつと、その心配は当たっているのだろう。

冷汗が彼の背を伝った時、助けの手は伸ばされた。

「おい、そこのお前、何をやっている!!」

最初、二人はそれが救出の手であると分からなかった。

やってきたのは、いかにも上役といった様子の、細身の男である。  
ここにいる男よりも上の位らしく、男はびくりと身をすくませていた。

横にいる、べったりと彼によりそっている女も冷たい目で睨みつけていた。

「こ、こいつらが逃げようとしていたんで、ちよいと痛めつけてやろうとおもっただけでさ」

「その必要はない。逃げたくても、ここからは逃げられないからな。さつさと部屋に戻れ。さもないと、このガキどもの代わりに、お前を痛めつけるぞ」

男は怒りで顔を真っ赤に染めたが、やがてくるりと身をひるがえすと

その場から立ち去った。ルーたちは驚きのあまり立ち尽くすばかり

だ。

「ルー、シオン、大丈夫か？」

「っ！？ 何で名前を！？」

いきなり名前を呼ばれ、シオンがぎよっとなる。しかし、男はにやりと笑うとネタバラシした。

「俺だ、ルイアⅡラクレンサ、だよ」

「ロツカⅡロツタです」

「俺たちも潜入してたんだよ。お前らばかりに危ない橋渡らせる訳にはいかないからな」

「……いかにも重厚な造りですよね。」

一度入ってしまったら、出ることさえ難しくなる」

ロツカは唇をかみながらも、紅く腫れた

シオンの手を魔術で治療してくれた。

シオンは痛みがひいて息をつく。

「私たちは出口を探します。」

ですが、あなたたちはもう部屋に戻った方がいいですよ。また掴まりますから」

二人はこくりと頷くと、手をつなぎ合いながら部屋に戻って行ったー！。

## 科学者ギルドの潜入者たち（後書き）

サヤたちの任務が始まります。  
もうすぐ完結ですが、  
まだまだ続くので  
最後までお楽しみください。

## 科学者ギルドの潜入者たち その二

あずまなぎこ

吾妻夙は不安な面持ちで

堅いベッドに腰かけていた。

今、彼女は留守番である。

他の三人は今出でいて、帰ってはこない。

一人は嫌いだ。あの時の恐怖を思い出すから。彼女たちはそこそこ強いし、そんなことにはならないかと思うが、不安はぬぐえなかった。

ここは、なんといつても『科学者ギルド』だ。普通の神経の者など、いない。

知識欲に狂った者か、人を殺したい殺戮狂か、人を傷つけたいいかれた趣味のものたちだけだ。夙はかたく拳を握りしめると、二人の無事を祈って黙って目を閉じていた。

その頃、ルミアと夕顔は途中で参加したゆきなと共に歩いていた。

全員男装しつつ歩いている。

ルミアはキレた時の対策に、度の入っていない縁なし眼鏡をつけていた。

バレたら大変だからである。

「まったく、なんで誰もあたしに気がつかなかったのよ」ゆきなは拗ねたような顔をしながら歩いていた。

彼女は家の都合でかなりの間休んでいたのだが、ギルドメンバーはそんな彼女の存在を忘れていたらしく、彼女がギルドに来た時、子供二人とルーンとエリオットしかいなかったのだった。

事情を聞き、すぐに飛んできて今にいたる。

「仕方ないでしょう？　あなただつて、しばらく来られないということしか言わず、今まで連絡さえしなかったんだから」

「それは、悪かったわよ」

夕顔が言い返し、うつと詰まつたゆきなは素直に謝罪の言葉を口にした。

と、ルミアがしつ、と口に指をあてていた。

「何か聞こえない？」

「えっ！？　……そういえば、聞こえる！」  
「隠れるわよ！！」

三人はひっそりと身を隠した。

夜に出歩くことは危険だと、ここですごした時間が多い彼女たちは知っている。

ルミアは力を利用され、ゆきなはここで隔離されて一族の力を知るための拷問を受けさせられ、夕顔は被害者の世話係をさせられていたのだった。

ゆきなは秘密を割ることはなかったけれど、

いまだに心の傷は消えず、体にも消えない傷があった。

夕顔は一見何の被害にもあつていないようにも見えるが、死んだような目をした者たちを何度も見せられ、力不足で見殺しにしてきたのだった。

だから彼女は逃げ出し、ギルドに入つたのだ。

「やつぱりやめた方がよかつたんじゃない？　……？」

「今更言つたつてしょうがない！！」

とにかく、すぐにあいつらを探さなくては！！」

三人の顔が安堵の色になった。

聞き知つた声は、エリオットとルーンのものだった。

何故ここにいるのかは気になるが、とりあえずは安心してもいいだろう。

一番先にゆきながそこを抜け出すと、

二人の元へと急いだ。

二人は一瞬ぎよつとなつたものの、  
相手がゆきなたちであることに気付き、ホッ  
と胸をなでおろした。

ルーンは被害者ではないが、

エリオットにこのことをいろいろ聞いたのだろう。

「何であんたたちがここにいるの？」

ルミアがつっけんどんな口調で聞いた。

二人は、予定では居残り組みとなっていたのに、  
何で来たのかと幾分きつい聞き方だった。

ルーンは鼻じろんで黙ったが、エリオットは  
困ったような顔をしながら告白した。

「実は、あの二人が脱走したんだ。

どうしても、友人とやらが気になってしょうがなかった  
らしくて、俺たちの食事に眠り薬まで仕込んだんだ」

「ね、眠り薬……！？」

夕顔がぎよつとして叫んだ。

あの子供たちがそこまでするとは思えなかったのだろう。

「それで、仕方なく俺たちも潜入することになったんだよ」

「夙はどこにいるの！？」

「部屋にいるわよ。留守番として残しー」

「一人で残したのか、夙様を！！」

エリオットが絶叫するかのような声を上げたので、

三人は耳を両手で押さえなくてはならなくなった。

それから、おろおろとなだめにかかる。

「ちよつと、エリオット！！ 見つかったらどうするのよ」

「夙のことは心配いらないわ。むしろ、外にいる私たちが  
危険なのよ。あまり大きな声を出さないで」

そして、ルミアが続けて言った言葉に、  
彼の眉がひそめられた。

「エリオット、あんた、夙に過保護すぎるよ。

彼女はあんたが思ってるより弱くはないし、

赤ん坊でも子供でもないんだから」

「夙様は俺の主だ。守らなきゃいけないんだ!!」

「もう、やめなさいよ!! とりあえず、一度部屋に戻るわ!!」

いなくなつたという子供たちも心配だったが、ここに  
そろそろいても見つかるだけだ。

全員は部屋に戻ることにしたが、

彼らを出迎えた夙は驚いたような顔をするばかりだった。

「エリオット、ルーン!?」

「夙!! 子供たちを見なかったか!?」

「夙様、ご無事でよかった!!」

二人の声がかぶってしまったため、夙はいさめるように  
言つと別々に話させ、ようやく要領を得た。

それから、ため息交じりに彼を見つめる。

「前々から言おうと思つていたけど、私のこと、もう様  
づけで呼ぶのやめてくれないかしら、エリオット」

「何故……ですか?」

「私はもう巫女じゃないの!!」

うんざりなのよ、夙様夙様って!!

思い出させないで!! 私はある時のことは忘れたいのよ!!」

彼女の声は叩きつけるかのような響きを帯びていた。

エリオットは何を言っているかわからなくて黙る。

夙は言いたいことを言つと、くるりとそのままきびすを  
返して部屋を飛び出した。

エリオットが追おうとするが、その前にルーンが  
部屋を出て彼女を追いかけていた――。

## 科学者ギルドの潜入者たち その二（後書き）

夙を一人部屋に残し、

いろいろなことを調べるルミアたち。

そこに、エリオットたちも参入した。

彼の登場に、ついに夙が貯めていた感情を爆発させる。

彼女はどうなるのか！？

次回、清らかなる少女との出会いを  
よろしく願います。

## 清らかなる少女との出会い

あすまなぎと  
吾妻夙は、泣きながら走っていた。

ルーンが追いかけてくるけれど、そのことには気が付いているのだけれど、止まらずに走る。

あんなこと、言うつもりではなかった。

だが、夙はここで過ぐすうちに不安になり、

つい心のためこんで一生言うつもりではなかったことを吐き出してしまったのだった。

どうしてあんなことを言ってしまったのだろうと、後悔ばかりが浮かんできて一向に頭が冷えない。

と、向こう側から何者かがやってきた。

服装を見て、このギルドの者だと気づく。

その瞬間、顔から血の気が引いた。

ルーンも立ち止って青ざめている。

それは、ギルドの男の表情が

楽しげであつたからだった。

(しまった……忘れていた!!)

「おい、そこで何をしている」

ルーンも夙も答えることができなかった。

動くことさえもできずに固まっている。

男が夙の肩を掴もうとした、その時だった。

「なに、してるの……？」

幼い少女の声が響き渡った。

不思議な雰囲気少女だった。

肌の色はまるで生きていない人形を

想わせる青白い色をしていて、

目はガラスを想わせる青い色。

白だか銀だか分からない髪を腰まで垂らしていた。

決して威圧的な雰囲気ではない。

しかし、何をしているのかと少女に問われた男は、まるで殺してやるとでも言われたかのように青ざめて行った。

少女は夙の前までやってくると、無機質な瞳で男を見つめていた。

「ここで、何、してるの……？」

もう一度問う。ひっ、と喉の奥で悲鳴を上げた男がじりじりと後退した。

少女の声も表情もあくまで穏やかなのである。

「お、俺はただ散歩をしていただけです。

ご、ごきげんよう守護姫様……！」

男は逃げるようにその場から去って行った。

守護姫と呼ばれた少女は黙ってその後ろ姿を見送る。

「あの、あなたは……？」

夙が問いかけると、少女は何も言わずに踵を返した。助けてくれたのだろうか、と思ったルーンがお礼を言うために肩に手をかけようとする。

とー。

「な、何……！？」

手は少女の体を突き抜けた。実態がないのだ。

ルーンはもう一度手を伸ばしたが、今度もその手は空を切って触れることはかなわなかった。

「お前、何者だ……！」

「私は、守護姫……」

それだけ言うと、少女はまるで幽霊でもあるかのようにふっと姿を消したー。

同時刻、倉木ルカ＆サヤライリーは。部屋でとりあえず休んでいた。

サヤはここに以前いた時のことを思いだしたようで、うつむくようにかたいベッドに腰かけている。

その顔は前髪に隠されて見えなかったが、かなりつらそうなのがルカには分かっていた。

ルカも死んだ妹のことを思い出してうつむく。暗い空気がその場に流れ始めていた。

最初部屋に着いた時は、カラ元気かもしれないが、彼女は元気だったのだった。

その表情が陰ったのは、白衣を着た男が採血に来てからだった。その瞬間、サヤが青ざめたのだ。

ルカが手を握ったけれど、そんなものなどなくさめにもならないようだった。

男はサヤが男装していたこともあり、

彼女の正体には一切気付かなかったけれど、

サヤはこの男を知っていた。

実験だと称して妖しげな薬を飲ませ、

サヤを苦しめた張本人だったのだ。

サヤが悲鳴を上げたり逃げたり

しなかったのは、奇跡に近いかもしれない。

なんとか採血が終わり、サヤはその後

一言も口を聞いていなかった。

ルカはサヤの体が小さく震えていることや、

隠れた顔から涙のような雫が垂れていることを、

見てみないふりをしていた。

サヤが泣いている、ここでの恐怖に震えている。

その辛さを体験していないルカには、

彼女に何か言っただけのこと、

なにもしてあげることできなかった。

そんな時だった。

「開けて！！開けてください！！」

「助けて！！ 僕達を助けて！！」

二人分の悲鳴が響き渡ったのだった。

それは、イルクゥタルデアとアニタゥリスキールの声だ。

サヤははっとなつて涙をふいて顔を上げると、

すぐに扉を開いて二人を出迎えた。

二人はサヤとルカの姿に驚いたものの、

何も言わずに部屋に入るとほっと息を吐き出した。

「何で、お前らがここにいるんだよ？」

サヤは若干和らいだ口調で二人に椅子をすすめた。

二人は罰が悪そうにうつむく。

「彼女を、放つておくことができなかったんだ。

だから、眠り薬をルーンたちの食事に仕込んで……」

「馬鹿野郎！！」

「ひゃああつ！！」

アニタが説明すると、サヤがカツと紅い瞳

に怒りをにじませて怒鳴りつけた。

二人が悲鳴を上げ、ルカの後ろに退避する。

「お前ら、分かってんだろ！！ ここが、

どういう場所だか！！ 大人しくギルドにいればいいものを」

でも、サヤには仲間の危機に何かしてやりたいと

思う気持ちがよく分かっていた。

ため息をつき、ベッドから降りる。

「しばらくここにいろよ。分かっていると思うけど、

食事には手をつけるな。行くぜ、ルカ」

「リーダー？」

「早く出口探して、こいつらを帰すんだよ」

サヤはルカの腕を引いて歩き出した。

ルカがどうしたかと聞くと、出口を探して

こいつらを早くここから出すと返ってきた。

ここは科学者や狂ったものたちの巣窟。

食事さえも、否水でさえも被験者たちには  
何がふるまわれるかは分からない。

それは、ここですごしたのなら全員が  
知っていた。世話係だったという、夕顔さえも。

早くここから出たいという欲求をこらえ、

サヤはルカの、頼りになる仲間の手を

掴みながら歩き出すのだった――。

## 清らかなる少女との出会い（後書き）

ついに清らかなる少女が登場しました。

彼女の正体は誰なのか！？

そして、アニタたちがサヤと合流。

サヤたちは二人で出口の搜索

に乗り出します。

次回もよろしく願います。

出口を探し出せ！！

サヤ「ライリーと倉木ルカが出口を  
探している、その頃。」

ルーズ「ドラクルと、シオン」エレットは  
とりあえず部屋で休息を取っていた。

ルーはベッドに寝ころび、シオンは内容が  
分かっているのかと思わせる速さで本の  
ページをめくっている。

「ねえ」

ルーが小さな声で聞くと、びっくりとシオンの  
体が跳ね上がった。文字通り、本当に

飛び上がったのでルーはきよとなった。

「何だよ？」

睨みつけられ、ルーは不満そうに頬を膨らませていた。  
声をかけたただけなのに、何故睨まれなくてはならないのか、と。

シオンはそんなルーを無視するように本を閉じた。

「そろそろ、行くか」

「まだ出かけるの？」

「当たり前だろ、リーダー達も活動してるはずだ。  
僕達だけ活動しないわけにはいかないぞ」

「う……ん……」

ルーはシオンが怪我をしたことを思い出して  
乗り気ではなかったが、仕方がないので部屋の外に  
でることにした。ここにいると、本当に落ち着かない。  
恐怖と不安な気持ちがよく見えるから。

シオンには分からないのだろうか、ここで暮らした  
ことがあつたに違いないのに。

それとも、分かっている無理をしているのだろうか。

あえてルーは聞かずに歩き出した。

そろそろ、空が明るんでくる頃なので、問題はなくなるころだろう。

ルーがため息交じりに呟いた言葉は、シオンには聞こえなかったようだ――。

一方、サヤとルカもまた出口を探して奔走していた。その手はしっかりと握られたままだ。

「見つかんねえなあ」

「次、あっちを見てみましょうか、リーダー」

「ん、分かった、あっちな――！」

空が明るくなりかけていた。

かなり長い間探しているのにもかかわらず、一向に出口が見つかる気配はない。

サヤは舌打ちしながら牙をかみしめた。

「あいつら、一体どこに出口を隠してやがるんだ」  
「すぐに分かる場所にはないことは分かっていた。そうならば、すでに多くの者たちがここから逃げ帰っていることだろう。」

ほとんどの者たちが帰ることなく死んでいく、それがこのギルドだ。サヤ達は逃げ切れた分、幸せなのだと思うほどに。

実際、ルカの妹は逃げだせたものの自殺をはかってこの世にはすでにいなかった。

無事に逃げきれたとしても、サヤ達のようにトラウマや心の傷を抱えたものたちはかなりいる。

「ああ、朝になる……」

ルカに言われ、サヤは再び舌打ちしながら窓の外を見つめた。美しい朝日が顔を出していた。きれいな光景だけれど、今のサヤには楽しめる

ものではない。

「俺達、いつここから出れるんだろう」

サヤの心に不安の色が混ざりはじめた。

一生、出られないのではないかと。

震え始めたサヤの両腕をルカが取った。

「大丈夫ですよ、リーダー!!」

絶対に出口は見つかります!!」

「だと、いいけど……」

「諦めたらそこで終わりです!!」

ルカになぐさめられ、サヤは少し元気を取り戻して歩き出した。と、前方に何か、いや誰かがやってくる。

それは、音もなく二人に接近してきた。

「アニタ達に、伝えて、私は大丈夫だからって」

「あんた、まさかあいつらが言ってた友人か!？」

ちよつと来てくれよ、あいつらもあんたに

会いたいって……」

「私は、いけない」

サヤが伸ばした手は空を切った。少女に触れることが敵わず、サヤは何度か手を伸ばしたが一度もその手に感触が現れることはなかった。

「アニタ達に、帰ってって言って、私は、大丈夫だからって」

「お、おい、待てよ!! あんた一体なんなんだ!？」

サヤの言葉を聞くこともなく、彼女はフツと姿を消してそれから戻ってくることはなかった――。

出口を探し出せ！！（後書き）

清らかな少女、再び登場です。

彼女の正体は誰なのか！？

次回はシオンの過去話を  
書きたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1654m/>

---

ホラーギルドへようこそ！！

2011年10月7日08時10分発行